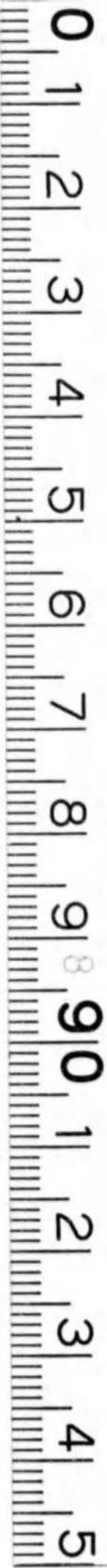
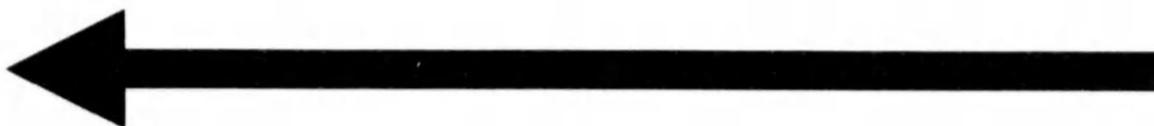


357  
288

357-288  
1200501411147



始







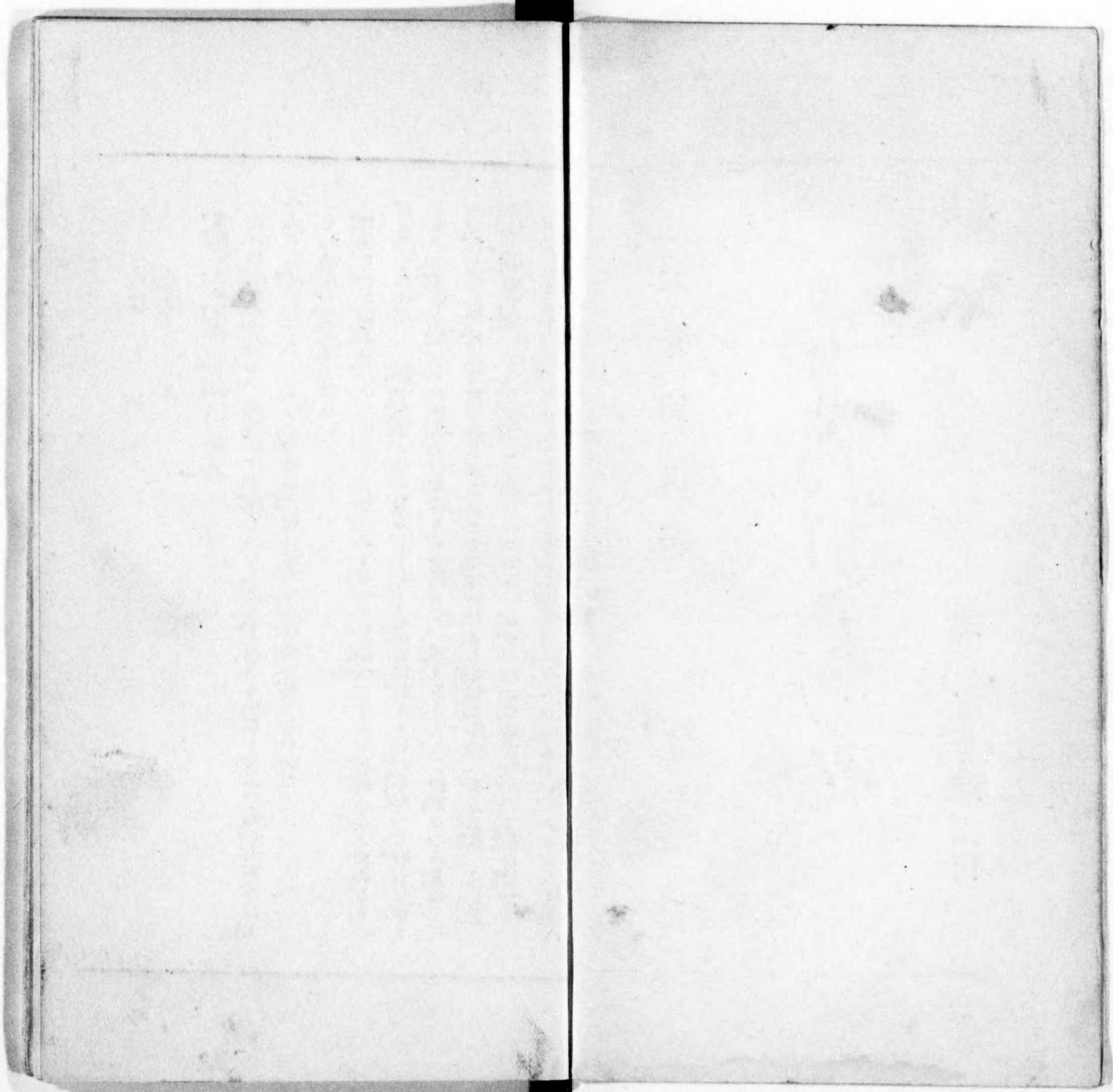
矢野錦浪著

古事類考紙

納本

博文館刊





世間の人は川柳を見縊つて居る。

あれは下女や居候や、花魁ばかり相手にして居る下品なものだと云ふ。しかしそれは大へんな間違ひだ。そんなことを云ふ人はほんたうの川柳を知らないのだ。

それは全く他人事ではない。

屹度自分が圖星を指されて居る筈だ。よく味つて見給へ、そんな馬鹿なことがあるものかと云つたつて、人間一生赤ン坊で暮らしてしまふ譯には行くまい。學校へも行けば戀もする。失業の心配もすれば明日の米にも氣を減らす。種々さまざまな經驗をつみ重ねて死んで行くのだ。死んでからのことは別として、いけとし生けるもの、喜怒哀樂、その悉くを第三者の立場になつて嘲笑して居るのだから、必ずどれかにはぶつかつて居る筈だ。フ、ンもよからう、アツハツハツもよからう、テツヘツヘツへもよい、エヒ、も敢て

悪いとは云はない。オホ、、に至つては斷然歡迎する。

著者川柳を作り初めて二十年、何萬と云ふ中から、みなさまへお目にかけるやうな句はこれつほつちである。選り抜きと云へば選り抜きだが、如何に川柳が作るに難いかと云ふことはこれでも御諒解が得られる筈だ。

遠慮なく罵倒して貰ひたい、そしてお氣に召したものがあつたら褒めても頂きたい、どうせ今まで生きた程この先生きられぬ著者である。これから死ぬまで作つたとて、この半分も出来れば關の山だ。

而して後世「むかしの人はうまいことを云つたものさ」なんて、其一つでも覚えて居て頂いて、親の意見にも、借金の云ひ譯にも、應用されるやうだつたら、天下に素晴らしい名を残すと云ふもの、死んでからのことを楽しみに、此本を出して置く。

昭和五年八月

矢野錦浪

目次

うきよ川柳……(色 刷)……………巻頭

父よ幸あれ……………一

昔の親父……………一〇

母なればこそ……………二

古 い 母……………三

妻 に て 候……………三

子供可愛や……………七

金の世の中……………壹  
 いろくな金……………壹  
 これ小判……………七〇  
 酔て如件……………七一  
 氣狂ひ水……………八三  
 女房同士……………八五  
 温泉場小景……………九五  
 戀をする頃……………一〇九  
 嫁姑和合の秘訣……………一三三  
 出ものはれもの……………一五九

大一座風景……………一四一  
 へほ將棋四十八手……………一五二  
 あら目出度いな……………一六二  
 新年氣分……………一七〇  
 歳晚風景……………一七一  
 ?の人々……………一七七  
 阿鬼齊句抄……………一八七  
 恚ふ思ふ……………一八八  
 こんな事……………一九九  
 獨り思ふ……………二一九

商賣往來……………一五三

この風景……………一五四

小人閑居……………一五七

生活風景……………一六九

日常茶飯……………一〇一

四角八面鏡……………一〇四

装幀……………矢野錦浪

うきよ柳



自転車が大きくよける笹屋の荷



バーの犬臭れろいやいと云つた顔



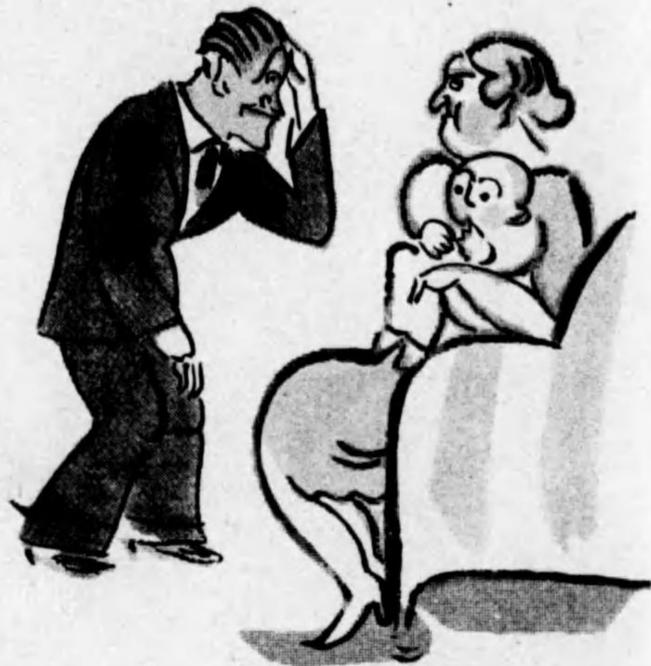
あやふやに謝まつちまふ  
交換手



何かしら云ひ置いて出る  
禿頭



異人の子  
可愛いけれどあやされず



骨と食ふ猫思ふさま

首を曲げ

乳母車前を  
持上げて  
廻れ右



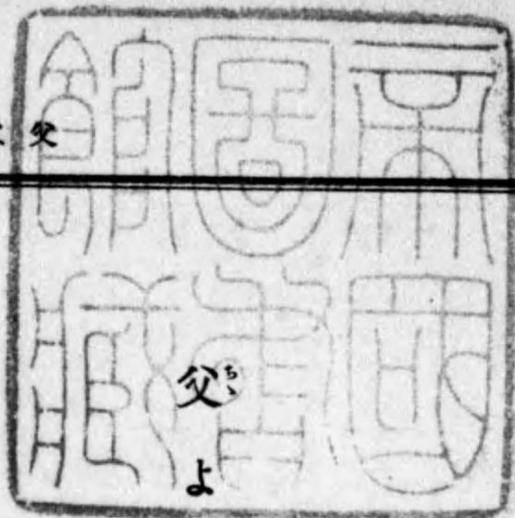
伸のびから舞おしやく妓ぎこぼれるやう  
に降おり



レモ  
ンター  
レモンが  
鼻はなの先さきで  
邪魔じゃま



1...れあ幸よ父



幸

あ

れ



お父さん：…今日はしみじみと私達の話聞いて下さい。誤解して居たのです。お父さんが私達を無性に可愛がつて下さったことなんか、思ひ出さうにも遠い昔のやうに考へられて、今では只おごそかの凝りのやうに感じてゐるのみです。早いはなしが、いつたい親父なんてものは、朝起きると何處かへ居なくなつてしまつて、晩御飯の出来た時分になると歸つて来る、そしてお母さんを怒鳴りつけては寢酒の一合も餘計香まうとたくらんで居るだけの人で、お母さんの手に餘る時に私達を吐りつける役目に頼まれて来て居る人ぞとばかり思つて居りました。濟みません。

父の頼つかめば父の嬉しさう

膝の上でおしつこしても喜ぶ父、馬乗りになつてお尻を叩いても嬉しがる父、腕白なのが達者な證據だと遊面一つ作るでなし、障子は破らせ放題、「さあ坊やお出で」なんてギゴチなく抱っこされるのが迷惑でね、眼の上や頬つべたを引つぱたいたりしても喜んで居ましたね。私達は宜氣になりました。だから一體お父さんが甘やかし過ぎると母はこぼしてゐました。



晩酌の父へ子の智慧今日も殖え

何よりも楽しみなことは子の育つことだ、とは後で聞いた話ですが、今日にはア、ちやんが出来た、ウマ〜が云へたと云ふ母からの話を聞くとどんな難かしい顔をして居ても、ナメクジへ鹽をかけた時のやうに、忽ち顔の雑作がゆるんで来て只たわいなく喜ばれたお父さんだつたんですつてね。そんなにも私達の存在はあなたを意義づけて居たんでせうか



いたづらへ母父さんの顔を呼び

それ程可愛がつて下さつても、おつぱいのあるお母さんの方が甘へやすくて、お父さんと云へば何となく恐いもの、やうに感じたのは不思議です。だからお母さんはこうした弱點をつけこんで、私達を脅喝す材料に「お父さんのお顔を御覽」と直ぐにやります。私達は正直でした。悸乎としたものです、これが慈母嚴父の教育と云ふんですつてね。



父さんに馴すは後が出来てゐる



無理もありません、お母さんの身勝手とばかりは云へません、手少な家庭ですもの、坊やお又さんとねんねするんでよ、おとなしく訓されしも、不思議だとは思つて居ませんでした、今になつて考へて見るとその頃はもうお母さんは酸っぱいものが食べたくなつて居たんですつてね、その酸っぱいものが弟だつたんでせう。

学校と社で朝飯が二度になり



そうして居ながらお父さんとは逢はない日が幾日もありましたね僕が学校へ行つてしまつた後でお父さんはおつとめにお出なさる。僕が寝ちやつた頃お歸りになる、そんな日が續くと幾日逢はない日が續いたらう、それでも別に不思議とは思ひませんでした、なるべく八釜敷い親父なんか居ない方がのびくするやうな気がしてました。

子を連れて出る日曜は義務のやう



全く御迷惑でした、電車にしても圓タクにしても足手まとひな子を連れて動物園か植物園でせうお父さんのつまらなさうな顔がありくと判りました、「俺一人だつたらな」と妙な胸算用をして居るやうな顔も見ましたもの：：でも歸りのお馳走なんか何を食べる何を食へるつて御自分が頂く一合か二合のお銚子さへオチく召上つて居られなかつた様でしたね。

父さんそのけ者にして無事な家



何かといふと「父さんが八釜敷いから」といふのが母の逃口上でした。結局お父さんの留守の時の方が活動かねだるにも野球を見に行くにも、気が楽だつたんです、お母さんは只お父さんに叱られないやうにして居さへすれば、それで宜いんですもの、結局お母さんも私達には甘かつたんですね。尤もそれは、其實お母さんも恐かつたのかも知れないがね。

通知簿の丙へ父親押だまり



勉強の足りないのはお母さんのせいぢや無いんです私達の怠慢なんです  
お母さんは取なして下さるのですが、何故かお父さんは鼻の両側に深い皺を疊んで、黙つておしまひになります。腑甲斐ない子供だと思ひになつて居らつしやるのでせう。と...あの時こう思へば、一生懸命勉強する氣になつて、お父さんも喜ばれたでせうけれど...

朝の膳父おごそかな顔てゐる



仕事の手順でも考へてゐらつしやるんでせう、父の顔は輝いて居ます  
父の腫は何か數へるやうに動いてゐます。私達は子雀のやうに食べるものだけを食べて、學校へ出て行きます。うちのお父さんは恐いね、叱られるんぢやないけど何となく恐ろしいね。それでも學校へ行つて了ふと、すつかり忘れちまつて、歸には叱られる種を拵へて歸る私達でした。

ある日母しみく父の話なり



お前達の爲めにお父さんはどれ位御苦勞なすつていらつしやるか判りませんよ、俺はもう慙うすると云つたつて仕様がなせめて子供達でも豪くなつて貰ふより他はない。それには働くんだけ、根限り働くんだけ、そして子供達に出世して貰ふんだつてね。だからお前達も勉強して豪くなつてお呉れ、むかし誰それと云ふ人は...なんてよく云はれましたね。

心配な父へ家中水を打ち



母でさへ父の氣持の暗い時はおどおどしてしまふんですもの、何事か起るんだらうとおもはれる豫感が、襟元から水をかけられるやうに沁み渡るんです、私達にとつてはこれが何より嫌な氣持でした。今にも母と云ひ合ひでも始めやしないかと思つてハラ／＼することがあります。でもこんな時は母の方がチャンと心得て居て、何とかかんとかうまくやるものでしたな

留守番の父は鋸なんか出し



いつにない宜い機嫌の父でした、さア〜今日  
は俺が留守番をしてる  
てやるからお前達は上  
野へでも浅草へでも行  
つて来な、なに？ 晩  
のお菜、い、よ有合は  
せもので食べて置くから心配せずにゆつくり行つ  
て来な、菜切庖丁も出しときな、序に研いで置い  
てやるから... 歸つて来ると、流しの棚と便所の  
手洗臺が蜜柑箱の蓋で新しく出来て居る。

ある夜父子等の話を母とする



長男は宜いとしても、次男をどうするかな、長  
男だつて折角學校を出たん  
だ何とか考へなければなる  
まいぜ、次男の奴は少し活  
澄すぎるからな何にならう  
と俺達の迷惑になりさへし  
なければ宜いや、まづ心配  
なければ宜いや、まづ心配  
なのは妹の方だ、もう二三年経ちやア嫁の仕度  
一苦勞させられるぜ。「だから生活の方は少し切  
りつめても」「い、よ俺が稼ぐよ」

貧しさと戦ふ父の頬の色



ある時は反感をさへ持つお父さんだが、俺達の  
爲めにあのやうな苦勞をな  
さると思へば勿體ないね、  
自分はどうどうすることも  
出来ないんだから、せめて  
子供達でも...と仰有つて  
る言葉が私達に取つては深酷なんだ、何とかして  
お父さんを慰めて上げなければならぬ。斯う  
考へて来ると、もつと勉強して置けばよかつたと  
思ひます。まあ宜い職工でも何にでもなります。

これしきに喜ぶ父の老ひを見る



我子なればこそだ、世間から見たらあたりまへ  
の事なのに、父なれば  
こそ喜んで呉れる。勉  
強するんだそして立派  
なものになつて、安心  
さしてやるんだ、親孝  
行と云ふものは、病氣な父に好きなお酒を買つて  
来てやるのが紋切型だが、あゝして私達の氣休め  
にもコロ〜喜んで下さるとこを見ると、これも  
親孝行の一つだ。お父さんお休みなさい。



◇昔の親父◇

子を持つてやうく親の馬鹿が知れ  
孝行のしたい時分に親はなし  
銀煙管銀のやうだと親父云ひ  
兩眼くわつと見開いて親父負け  
父親が拾へば文も静かなり

母なればこそ

尊くも見るかな母の小さい顔

お母さん...そこへお坐り下さい。  
今日只今、改めてお詫び致します。私は...いや私ばかりではありません。誰でも必ず一人づつ、は持つて居るお母さんであります。私共を今日迄育ぐんで呉れたあなたに、私は衷心からお詫び致します。

母親は寝ると戸棚の方を向き

何と遠慮勝ちなお母さんでせう、だから私達は圖に乗つてしまふんぢやありませんか。

子もうんだ脱け敷であり母といふ

私共はこんなことを云つて居ました。あなたの愛育は盲目的でした、その愛に狎れて私達はどんなに輕蔑したことでせう、無理を云つたり、甘へたりすることは、時に取つて、あなたの愛を昂奮せしめる材料であつたかも知れませんが、私達は私達の享樂のみを考へて活動へ行つたり、カフェーで華やかなジャズを踊つたりして居ました。そればかりではありません。ある時は大それた世にも恐ろしき病氣まで背負ひ込んで性病科へ通ふ薬代までお母さんに出さした私達です。

留守番の母雑巾が二つ出来



それなのに、それなのに、あなたは何の不平もなく一生懸命に家のため私達のために無駄な時間を追つて居ません。勿體ないことと思ひます。仄暗い五燭の下に眞鍮縁の眼鏡をかけて丸くなつて居るあなたの姿は何といふ氣高い慈愛の結晶でせう。それは私達を幸福へ導くべく神様から派出された天使そのものです。感謝します。

家中でいつちまづいは母の膳

全くあなたは蔭の人で甘んじて居られるのですか、お父さんや私達には一通りのご馳走をつけながら、自分だけは、そんな粗菜でしかも臺所の片隅で、それで満足されて居るのですか、もしさうだとすると、何と云ふ崇高な至情でありませう、  
臺所で食べる母親むかふ向き  
せめて御飯時位ゆつくりと寛いで頂きたいのに、それからそれへと追はれる母の多忙は、へんてつもなく食事を済ましてしまひます。

母親は残ったものを焼いて食ひ

それまでにしなくとも宜いぢやありませんか、  
あなたは私達の親です。堂々と私達をこき使つて、  
立派に威張つて居られるのです。つゝまじやかな  
女性の表現と云へば、それまでですが、それ程遠  
慮するには及びません。

鐵瓶の蓋の干飯は母の智慧

私どもへおやつにこしらへて呉れる豆いりは、  
こうしたあなたの丹念さから、おいしく頂かして  
呉れました。

勿體ながつて母親叱られる

あなただつて、何も好き好んで食べ残しや宵越  
のものを選ぶ譯ではありますまい、これも家の爲  
めだとお考へになるからのこととせう、が、もし  
それが原因で身體でも壊したら、それこそ大へん  
です、あなたのお心はよく判つて居ます。

うどんかけ一つで直る母の風邪

まあ、なんと云ふ簡單なんでせう。ゆうべあん  
なに苦しうな咳だつたのに、今朝はもう起きて  
お臺所をなすつていらつしやる。

母親と一緒にオヘラつまらなし

ほんたうにあなたは家庭の道化役者です、夕飯  
を済ませば、すぐに眠くなる、それもお年の故と  
許りは云はれません、苦闘の結果です。それは時代  
が違ふからつて、頭から自分を古臭く取扱つてし  
まふから此新しい世界を無理解に了るのです。

喜びは母ヘラデオの浪花節

これしきのことに感謝するお母さんです。越後  
傳吉へすつかり同情してしまつたあなたは泣いて  
居ますね、鼻をつまらしてさ...

見たらけて母はあやまるハムライス

またしても、あなたは時代に遠ざからうとな  
さる。私達から侮られることにも甘んじるあなた  
が、つとめて世界を別にしようとなさらくとも  
宜いぢやありませんか、それだから私達がついあ  
なたに對して失禮なことを云つてしまふのです。

天井へ母手拭を膝に敷き

つゝましい女性の發露です。天井一つにも充分  
な奢りを感じるあなたの境遇に私達はいつそ悲哀  
を覚えます。それでも満足なあなたでした。

嬉しい日母は擽でかしこまり



嗚呼何と云ふ立派な愛でせう、軟かな乳房、温かい懐ろ、ひたすらに我子の上に幸あれと抱きしめて来た心が、より強い希望につながら、晴れやかな我子の慶事に、喜び溢るゝあなたの心を感激なしに見て居ることは出来ません。嘗ては私達のやうな日もあつたでせうに、輝かしい私達の前途へ満腔の喜びを捧げて下さる真心は尊いと云ふ言葉以外にありません。

國の母生れた文を抱き歩き



無理もありません、嬉しいでせう。子よりも可愛いと云はれる孫の便りですもの、あなたの喜びは、あなた一人で満足して居ることは出来ずまい。他人様があなた程感激する問題ではないのです。それなのにあなたは狂喜して、私達の幸福を享け入れて下さいました。「まあ聞いて下さい。私も之ですつかり重荷を下しましたよ」あゝ、あなたは孫迄責任を感じて居たのですね。

外へても寝やれと母は戸を開ける

お母さん、もうそんなに泣かして下さるあなたも心もちは、よく判つて居ります。父への遠慮我子への至情、さうしてあなただけが悶える取なし、早く歸つて来れゝば宜いと心の中で焦せりながら、持つて居て下さつたあなたの心持がよく判ります。さうした憤懣をこうした一言だけで、あとは何にも仰有らないあなたでした。何と申上げてよいか、今更ら私達は深き感謝を捧げることの遅いのを後悔して居ります。

母親は勿體ないが欺しよい

懺悔します、あの時も實は偽りの涙でした。あの場合も平氣で嘘を並べたのでした。それを一々受け入れて下さつて、共に涙を分けて頂きました、ねえお母さん、義経千本櫻と云ふお芝居と一緒に見に行つたことがありましたね、いがみの權太と云ふ男が、お茶を目へつけて母親を欺くところがあつたでせう、私は穴へでも入りたいたやうな氣がしました。それを考へると、私は恐ろしい罪のやうに思はれて、あなたに合はず顔がありません。

母なればこそ此嘘に五圓呉れ

そして、あなたが何よりも一番大切さうに、幾重にもくくりに包んだ紙入れから、丁寧に皺を伸ばした五圓札を出して下さいました、いまにして考へれば、それはくあなたの大切な虎の子でした。盆暮に父から貰ふお小遣ひ、お詣りの電車賃以外につかはないあなたの財産なんです。それをまあ何と云ふことでせう。うまくしてやつたと云ふやうな心持で、私は圓タクとカフェーのチップとに無雑作な使ひ方をしてしまひました。

母親は娘の嘘を足してやり



まだそればかりではありません。あなたの盲目的な愛に溺れた私達、いや妹までがあんな嘘を吐いたので、活動で時間を潰して来たのに、父親の手前を繕つて下さる、あなたの氣轉「ねえあなた、今日は學校のお友達と日比谷でひよつくり逢つたんですつて...一緒に連れれば宜かつたと云つたんですよ」ですつて...沁々とあなたの苦勞をお察し致します。

もう泣いちや居ませんと母詫びてやり

若い日の頃、こんなこともありました、お父さんは恐いものとして居た私達にも、ともすれば父の怒りに觸れることの多いいたづら盛りでした。いつでしたつけね、父が大切にして居る萬年青の葉をむしつてしまつたことがあつたじやありませんか、その時ばかりはあなたも大へんお困りのやうでした。それを庇つて下さつたあなたの心持は、今日の今まで變りません。あなたは神様です、そしてお年を召して行くのです。

メリヤスの股引を穿く母となり

初めのうちこそ、どうせ道化役者だとばかり思つて居た母親でしたのに、眞剣なあなたの努力をまざくと見せつけられる私達は、さうした滑稽な姿が、むしろ涙ぐましくなつて來ました。

腰布圍もうなりふりを氣にかけず

針の穴へ伸び上るのもお年の故です。安火を腰へ背負つて、ほどこき物をなすつていらしやるのも母の姿です。あなたは全く無爲にお年を召してしまひましたね。

### 我を折れと母からの文札が出る

いつの事でしたか、父の怒りに觸れた私が、ブイと飛び出したつきり、歸らないことが有りました。いくら親だつて伸びて行く子の権利を掣肘するのは暴虐だ、俺は俺で立派にやつて見せる。父のやうな古い頭に押さへつけられて居られるもんか。と反逆したことがありました。あなたはそれを非常に心配されて「兎に角茲で我を折つて」と旅費を下さつた事がありましたつけ、其時ばかりは母の有難味と云ふことをつくづく悟りました。

### ため涙母ほんたうに腹が立ち

父は直ぐに怒ります、怒れば怒鳴り散らすやら、あたりのものを壊すやら、傍へもよせつけぬ權幕です。それだのにあなたは、兩の眼に涙を一ぱい溜めたッけで、泣寝入りになつてしまふのが例でした。父を立てれば子が拗ねる。兩方をうまく納めやうとしたあなたの苦心は今になつてよく判りました。自分と云ふものを捨て、ひたすらに家庭を思ふあなたの至情が今になつてよく判りました。

### 南無女房乳を吞ませに化けて来い

それ程傍若無人な父でさへ、あなたが居なければ、屹度困るに相違ありません、母親が私達にだけ感激の標的となつて居るのでないことは、お隣の家の實例でもよく判つて居ます。「貴様のやうな奴は」なんて夫婦喧嘩の堪へ間がなかつたお隣りですが、産後の日立が悪くつて、其儘亡くなられてからの有様はどうです。男手一つで子を育て、行く苦勞が目に見えるぢやありませんか、それを思へば大切な大切な母親です。いつまでもくも健康で居て下さい。

### 母親にだけオムレツの心やり

今さらになつて遅い覺醒であるかも知れませんが、私達も私達が、私達の爲めに長い間苦勞して下さつたあなたに對して、こんなことにも氣を配るやうになつたことだけを喜んで下さい。

### 先へ寝ることに母の遠慮勝ち

それだのにお母さんは、また氣兼ねしていらつしやる。あなたは私達の親ですよ、親として充分な義務をお盡し下さつていらつしやりながら、子供達に對し何の遠慮があるものですか……

目の見えぬ母を助はる蓄音機

私達はあなたの将来を安逸にしてあげることが義務なのです、さア、お母さん、もつと前へお進み下さい。何をかけませう、あなたの爲めに義太夫と落語と、浪花節のレコードを買つて来ました。どれを先にかけますか、あツそれからあなたのお好きなお饅頭も買つて来ましたよ、さあ、あたゝかいうちに召上れ。

あなたの心労は、私達のかうした反省によつて報いられたと思つて下さい。お母さん、ゆつくりとお寛ぎ下さい。

◇古い母◇

井戸端へ子の行く夢に母の汗  
母親の意見拜むが云ひ納め  
さうであるさうであらうと里の母  
母親も共にやつれる物思ひ  
茲をよく聞けとおふる糸をこき  
候 間ばかり重なる母の文  
棒ほどのこと針ほどに母かばい  
里の母來るとお客のことを聞き  
こればかり着て來やると里の母

妻  
に  
て  
候

：：ねえ、お前！ お前と一緒に何年になる  
 だろ？ お前は俺の鼻の側の黒子と同じやうに、  
 一生俺と離れることが出来ないんだね——おう妻  
 よ——妻だなんていやに改まつちまふやうだが、  
 戸籍面には明かに妻と書いてある。奥さんの令  
 夫人だの、家の奴だの女房だの、嬢だの、御内儀  
 だの、お神さんだの、山の神だのつて、いろんな  
 名前を持つてるけれども、お前は矢張り妻なんだ。  
 考へて見ると随分長い妻だな、お前がお嫁に来る  
 時はどうだつたい。「若き日のブライド」なんてと  
 ころも有つたね。尤も其頃は俺にだつて青春の血  
 が漲つて居たからな……



一生の中の花だな、お前の心臓は数へられない  
 程動いて居たらしいね、  
 我もの顔に韓旋して居る  
 媒酌人、俺はそれが頼も  
 しく思へてならなかつた  
 掌の中の玉を奪られてし  
 まふやうな御両親の顔が  
 たゞく華やかな儀式に吞まれてしまつて嬉しい  
 やうに、悲しいやうに、ワクワクして居るのが御  
 氣の毒のやうにも思へたよ。

角かくし燦爛として下を向き

ホネムーン富士が見えたて口を切り



厚かましい方ではひげを取らない俺だが、二人  
 ツきりで汽車の中へ放り  
 込まれてしまつたには面  
 食つたね、お前も膝の上  
 へ手を重ねたきり、指の  
 先をモヂく見つめなが  
 ら、一言も口を聞いて呉れないんだもの、せめて  
 ……せめてだね、窓の外でも見て居て呉れ、ば、  
 何か話しかける材料が出来るんだが……と思つて  
 居ると富士山だ、富士は日本の霊峰だね。

高島田まともに見れば首を垂れ



耻かしかつたんだね、無理もないさ、實は俺だ  
 つて先刻からしみぐととお前の顔を味はないんだ  
 たゞ眼の中が熱くなつ  
 てしまつてね、並んで  
 掛けた腰を持て餘して  
 チョイ／＼お前の横顔  
 を盗んで居たよ、漸く  
 のことで決心をしたものだ、行きたくもない便所  
 へ行つて歸つて来るなり、差向ひに腰を下ろすと、  
 否が應でも眞正面だ、ハツとなつたお前の頬が紅  
 かつたね。



着替へさす着物に妻と云ふ氣持



二人の魂は結びついたね、御飯のお代りにも、  
 剥いて呉れる林檎にも、隔てのない心持の現れが  
 出て来るから妙ぢやないか、妙ぢやない面白  
 いか、妙ぢやない面白  
 いぢやないか、面白い  
 ぢやない嬉しいぢやないか、お前の夫だ  
 いか、お前だつてさうだつたらう、自分の夫だ  
 と云ふ強い氣持ちに背筋を這ひ廻はられたらう。  
 俺の耳元へ来るお前のあたゝかい息が、妙に昂  
 奮を咬るんだ。俺の後に愛妻が立て居る...とな

遅くなることを女房たしかめる



俺は善意に解釋する、だがしかし嫌な氣持のす  
 る時もあるぜ「お歸りは」  
 と聞かれると、さも俺が  
 浮氣者で、何處か遊んで  
 來るところでもあるかの  
 やうに、皮肉に聞える、そりや成る程晩飯の都合  
 もあるだらうが、何となく疑ぐられてるやうに聞  
 えるんだこんな時には「晩のお仕度は」と聞いて  
 貰ひたいね、それでも不可いかな 何しろお手柔  
 かに願ひたいもんだ。

これて社で叱られてると妻知らず



無理もないさ、お前の目には俺より豪い奴はな  
 いと思つて居るんだもの、此  
 寒いのに御苦勞様な、そして  
 チャン／＼と歸つて來る此俺  
 を頼もしく思ふだらう。重役  
 に呼びつけられて、ともすれ  
 ばチョン切られさうな首を鷹  
 揚に振つて來るこの俺を三ツ指ついて迎へて呉れ  
 るお前をいぢらしく思ふよ。だつてこれでもお前  
 には掛け替へのない夫なんだからな...

エフロンを取つて妻君酌に出る



それがお前の「よさ」だよ、友達がさう云つて  
 居たぞ、君んとこの妻君は  
 豪いつて、恐らくは君の家  
 庭をカづけける女王であり、  
 君をして意義あらしめる絶  
 大な後援者だつてね！そ  
 れぢや俺はまるでカス見た  
 いぢやないか、それでも宜い、悪い氣持はしない  
 よ、寧ろお前が妻であることを誇りとする。そし  
 て大いに見せつけてやる。

妻からの電話で急に聲を替へ



ハイノ、私でございます、どなた？ 何んだ  
お前か、なに？ 郷里からお母さんが来たつて、  
さうか、淺草へでも連れ  
て行つて上げな、なに？  
家の方は宜いよ、俺はも  
う直きに歸る、よしよし  
晩飯？ い、よ何とかし  
て食べるよ。お小使ひはあるかい、何なら社へ寄  
つて呉れ、いや俺の方も澤山持ち合はして居ない  
が五圓位ならある。い、から早く連れて行きな。

置きどころを女房あらしまし云つて出る



それでは行つて参ります、あの着物は亂れ籠に  
兵兒帶と足袋と一緒に  
入れてあります、それ  
に町會費を取りに来  
るかも知れませんが  
それは立替へて置いて下さいまし、掃除屋が来た  
ら、流しの上に吊してある切符を上げて下さいな、  
認印は火鉢の上の引出しにありますよ、お銚子は  
おきまりだけ整然と鼠入らずに入つて居ます、炭  
團が埋けてありますから掘り出さないでね。

女房が留守で流しが椀だらけ



あんなにいろく云ひ置いて行かれたのに何處  
に何があるんだか、薩張  
り見當がつかないや、ヤ  
ッ鱈の子があるぞ、占め  
占め、先達の海鼠腸はど  
うしちまつたんだな、あ  
ッ徴が生えて居らア、おや猪口がないぞ、この箸  
箱はどうして明けるんだな、へッ、奈良漬が切つ  
てあるぞ、誰だッ？ 月掛けの無盡ッ？ 俺には  
判らない、明日来いッ。

直し物らしい女房の長襦袢



かうやつて俺達は苦勞な世帯の中で稼がなけれ  
ばならないんだ、辛抱して呉れ、いまに子供達が  
學校を出さへすりや、  
樂隱居になれるんだか  
ら、融通の利く柄を撰  
る子澤山」と云ふ川柳  
があるが、お前にまで  
融通を利かせやうとは  
思つて居なかつたよ、華やかな昔の世界から、さ  
うして地味な境遇になつて行くのも、矢張り人間  
が一度は味はねばならぬ時代だな。

女房はまた金の事、金の事



そりや判つてるよ、家庭一切のきりもりをして居るんだもの、察しろよ、しかし俺だつて金の生る木を持つて居るんぢやないし、考へて呉れたつて宜いぢやないか坊やの帽子？ 去年の中間に合はして置きなよ、間に合はないつて？ チエツ親の心も知らないで、ぐんぐん大かくなりやがるオーバの月賦？ このあひだ渡したぢやないか、あれは先月のだつて？ 勝手にしやがれツ。

豫め悟つて女房へ、ンなり



勝手にしろ、一ヶ月に一晚や二晩遅くなつたつて、そんなに膨れツつらをしなくとも宜いぢやないか、男には交際と云ふものがあるんだ、何？ 遊んで来たつて？ 馬鹿妬く奴があるかい見つともない、よせよせ、それよりか茶でも入れな、おい何とか返事をしないか、ようツ睨みやがつたな。ようし、俺には俺の考へがある。何？ そんな脅しには乗らないつて...

腹の立つ門を開けるも女房なり



濟まない、今日はね友達の奴がどうしても交際へてんだ、いやさ、特に月給日だからつて譯ぢやないよ、しかし敵にうしろを見せるのも強腹だと思つてね、たうとうおでん屋へ飛込んだ譯なんだ、すると二次會と云ふんだらう、おでん屋の二次會と云ふのも變だが、敵にうしろを...けツぶ、やい怒つてやがるな。怒るなよ、たまぢやないか。

仲直り元の女房の聲になり



だからさ、俺があれ程懇々と云つて聞かしたぢやないか、兎に角嫌疑を晴らして呉れ、何の？ アハツハツハ、お前が臍線りをこしらへてるつて？ 冗談だよ怒るなく、良いぢやないか臍線が出来たつて、つまりは坊やのものになる位なもんだ、理解して居るよ、小使帳の大根の値が高いつて、あれは言葉の綾だな：馬鹿ッ、そんなにムキになるなよ。

火吹竹女房可愛い顔になり



はッはッはッは、長閑だな、なんて顔をするんだな、いくら色氣を放れたからつて、醜態だぜ、頭へ冠つた姉さん手拭はまアいゝさ、お尻を捲つてしやがまなくとも宜いちやないか、腰巻がやぶけさうだぞ、何ッ？ 腰布團だ、やれく、しかしもう少し女性づくつて呉れいくら理解があるからつて、あまりに原始的だぞ、あの花嫁時代を考へると隔世の感だね。

ある日フト妻を美人と見たりけり



よおう、素敵素敵、いやひやかすんぢやない、實際だ、髪の工合が大へん宜いよ、髪をもう少しふくらましな、前髪の調子はそれで良い、後ろを向いて御覽、さうだな帯の恰好はと？ もう少し下の方を締め上げて、端を心持ち斜にしてごらん、それでよし、それぢや出掛けやう、三越から何處へ廻るんだつて、そんなに買物は御免だな。

よいとまけ子から乳房を引ツこ抜き



あれを御覽な、生活の爲めとは云ひながら、朝の割引で夢の中から子を背負つて、出て来るんだ。晝休みだからつて、子供に乳をやらなきやならないんだらう、おちおちと休む暇なんかありやしないや、あれだからつて矢張り日本の女性なんだぜ、若かりしころは、文金高島田、花も耻らふ風情もあつたらう、然るに現實暴露の悲哀だね、それに比べれば俺達は幸福だな。

寄せ片れへ来る奥様の物狂ひ



おい、宜い加減にしないか、見つともないぜ、何？ 實用片れつてどんなだい、尺の長いのがあるつて？ 馬鹿ツ五十歩百歩だ、必要なだけを買へば宜いちやないか、襦袢の袖を取つて前掛が出来るんだつて、なる程ね、しかし折角の奥様もだいなしだぜ、御覽な息せき切つて、第一眼の色が違つて居る。

半襟屋亭主三三丁先待ち

これだから俺は嫌なんだ、買ふんならずばりと  
中へ入つて買へば宜いぢ  
やないか、風呂敷包みを  
抱へたまんま、クルク  
廻しながら、目移りして  
居る恰好なんか、傍で見



る目はあまり好いもんぢやないよ、子供が駄菓子  
屋へ行つたんぢやあるまいし、目うつりするなよ。  
早くにしないか、あれッ買はずに出て来てしまふ  
よ。

奥様と云ふ封筒が屑屋から

見抜かれてしまつたんだね、郵便屋も郵便屋だ、  
奥様と書いたものは御不用  
品拂下けの手紙で、令夫人  
と書いたのが算笥の月賦賣  
りと定つて居るんだから、  
しかし奥様だの令夫人だの



と云はれると悪い氣持はしないと見えるね、さう  
云ふ身分にしてやりたいよ、俺が出世しさへすれ  
ば宜いんだらう、いや夢のやうな話ぢやないさ、  
一寸都合よく行きさへすればな...

理想から理想へ妻も俺も老け

あの時代から比べると二人も年を取たな、けれ  
ども一向にどうもならんぢ  
やないか、それで宜いのか  
も知れない、もうかうなれ  
ば子供達の成長を待つより  
ないね、しかし希望と云ふ  
やつは、案外年を早く教へ



るものだね、お前もいとお母さん振になつたよ。  
何？俺もい親爺になつたつて、當りまへだお前  
がお婆さんになれば俺もお爺さんになるんだもの

何にても利く母ちゃんの子、ンブイ

おうよろしく、柱へぶつつけたの、この柱奴、  
うぬ、うぬ、ボンしてやり  
ませうね、何處何處、よし  
よし母ちゃんが おまじなひ  
をして上げませうね、チ、  
ンブイ〜ごよのさがづき  
さアもう直りましたよ、宜



い兒だね、サア早く遊んでいらつしやい、おやつ  
には何かおいしいものをこしらへて置ませうね  
...あ、宜いお母アさんになつた。

子<sub>こ</sub>  
供<sub>ども</sub>  
可<sub>か</sub>  
愛<sub>あい</sub>  
や

産見舞敷居跨ぐと聲をかけ



昨夜お生れなすつたんですつてね、まアお目出度うございました。わたしは來月頃だとばかり思つて居りましたの、ふだんお丈夫の方ですから...御安産で何よりですわ、女の子さんですつてね、結構でございますとも。いゝえ、一姫二太郎と云ふことがありますもの...それに女の子さんは早くお役に立ちますから、何よりでございますわ。

赤ん坊の手首しやぶつてやりたさう



このお手々を御覽なさい、くびれてさ、まるでお餅のやうですわ、おうおうぎゆうと握りしめてさ、あらお口へ持つて行かうとなさるのよ、こんな内から食べることに智恵が廻つて居るんですのね。こんなちや股がたれるでせう、天花粉が宜いんですのよ、お湯から上つた時に一寸振りかけて置きますとね...

赤ん坊のくしやみ生意氣さうに見え



まア御覽なさいよ、顔中皺くちやにしてさ、おつとどつこい、ハツクシヨイ、くしやみだとさ、まア一人前だわね、頼母しいぢやないの、ほんとうに可愛いぢやありませんか、おうく、こんどはあくびですとさ、おや、鼻の下をあんなに伸ばしてさ、これでお宮参りでも濟むと、そろそろ面白くなつて参りますよ。さあ坊や、せいせい一人前ぶつてごらんよ。

差し上げてやると赤ん坊足で蹴り



うちの人なんか、風を引かすと云ふのに寝かして置かないんですよ。まだ何にも知らないのに高いくのだの、お舟はぎつちらこだのつて、座敷中持ち廻つて居るんでせうまるで玩具にして居るんですよ、赤ん坊の方こそ宜い迷惑ですわ、それでも何をされて居るんだか一向夢中で居ながらも時々ゲタゲタ笑ふことがありますのよ。御重寶なものですわ。

キツスしてやるに赤ん坊横を向き



あの佛頂面でもさ、子は可愛いと見えて、あやし足りなくなると、いきなり頬ツベタをチユウチユウやるんですの、赤ん坊の方ちや屹度迷惑なんです、大人ならうるさいとでも云ひたさうに、クルリと横を向いてしまふんでせう...しまひには到頭抱きかめてはいつくくくするもんですから。可哀さうに泣かしてしまふことがあるんのですよ。

抱いた子に顔全體をつかまれる



うちの太郎なんかもう少してお誕生でせう。お父さんに抱っこすると、髻をむしつたり眼の玉を掴んだり、大へんな騒ぎ、それでも親父さん大喜びなんですの、「お、坊やは強い、これは御挨拶だ、おい、そんなにしちや痛いよ」なんかつて泣き聲を出しながら笑つて居るぢやありませんか。

子をあやすうちは本気の沙汰でなし



何處で覚えて来るんですか、...てなもんやないかく、道頓堀よ...なんて調子外れの流行唄をうたつたり、鳩ボツボをやつたり、百面相をして見せたりしてさ、笑へ、笑へつて、おしまひに脅喝するんですよ、そんなにして可愛がつても、お母さんはちやんと知つて居るんですね。

結局は母ちゃんへ来る手を擴げ



だから、いつもお父さんは憤慨なさるのよ、人がこんなにかわいがつてやるのに、おふくろの方へはつかり氣が移つて居やがるつて、だけどそりや無理ですわ、おつぱいと云ふものがあるんですよ...と云つてやつたら、そんなら明日から牛乳で育てるから、おつぱいなんか按摩膏でも貼つて置け...ですとさ



それ云はぬことか抱いて、だ、ア、いだら



屹度なんですよ、うちの人に抱っこすると必ずやるんですもの...先達なんか卸したての袴へやつちまつたんでせう、怒るわけには行かすさ、結局お父さんお母さん微笑の巻さ、それより滑稽だったのは、お客様が坊やを抱いて雞を見せながら、そらトウトウくとやると、いつも雞を招んでおしっこさせる癖がついてるもんですから、直ぐやつてしまつたんですよ。

笑つた妻は手柄のよに話し



でもお誕生ごろになると楽しみなものですわ、初めのうちは何かのはづみで笑ふやうなんでせう、それがだんだんゲタ〜笑ひをするやうになるんですもの、さうなると可愛さがまた別になつて來ますのね。まるで魂を吹込んで行くやうに智恵がついて來るんですもの、ですからうちの人つたら金で買へない玩具ですつて...!

二階迄見つけられずに子が上り



それがあなた、這ふやうにでもなつて御覽なさい、片時だつて油断なんか出来ませんわ、針仕事なんかに氣を取られて居ようものなら、何時の間にか何處かへ居なくなつてしまふんでせう？  
先達なんか火鉢の抽斗をみんな開けてしまつてあたしのカルモチンを見つけて食べたんですね、三時間も眠りつゝけてしまつたんですよ。

小説の片手這ふ子の帯を持ち



だから日曜なんかうちの人へお守りを頼むと滑稽ですよ、初めのうちは、繪本を見せたり、蓄音機をかけたりして神妙に遊ばして居ますけど、しまひには御自分の方が飽きて來てしまつて日當りの良い縁側へ陣取り圓本か何かに夢中になつてしまふでせう、そんな時は片々の手で附紐をしつかりと押へて、まるでお猿さんでも遊ばして居るやうなつもりなんですもの...!

子煩惱財布持せて困るなり



先達なんか急に子供が泣き出したものですから何か玩具を預けて下さいと云つたら、取りに行くのを面倒がつて、懐ろから裏口を出して持たしたものですすると早速口へ持つて行つてしまふぢやありませんか、お父さんびつくりしちやつてね、さあ大へんだ、お父さんにお頂戴つてお手々を重ねたり何かしてもなかく聞かばこそさ。

女の子願て喧嘩をして歸り



女の子だからつて憎まれ盛りは手がつけられませんのよ、この間なんかお向ふの美ちゃんとお隣の花ちゃんとか、最初は仲よく遊んで居たんですが、何でも毬の優劣論が、何でも毬の優劣論が、何でも毬の優劣論が、かつたんですね、あたしのは三越で買ったんだ、あたしのは浅草のおばさんに頂いたんだ、三越と浅草ではどつちが大きいと云ふのでさんざんな喧嘩よ。

女の子おつかがさつて火を起し



それでも一人になると流石女の子は女ね、しーんとして留守かと思ふと長火鉢の傍にしよんほりして居るぢやありませんか、お臺所から消炭を持つて来て、山のやうに積み上げてフー〜吹き初める。かき餅でも焼くのかと思ふとさうでもない結局兩の手をかざしておとなしくあたり初めるんでせう、さうなると何處かいぢらしいですわ。

出て行けと云へば出て行く男の子



そこへ行くと男の子は矢張り何處か利かない氣があるのね。お向ふの奥さんなんかうつかり叱言が過ぎたんで困つてしまひ、あべこべに今度は連れて来て謝まる騒ぎさ、だから坊やはもうあんなお悪戯をするんぢやありませんよ、お母さんもあんな叱言なんか云はないから」だとさ：さうなつて来ると子供を育てるのも容易ぢやありませんわ...

ピストルの方が刀の子に打たれ



この頃は剣劇ばかりでせう、何處で買つて來るんだか塗つた刀を差してさ河部五郎だの、大河内だのつて大騒ぎよ、だから西洋物のピストル連はすつかり壓迫されてしまつて、寄らば斬るぞにやられちまふんですもの。それにお向ふの子と來たら手が早いんですからね、先達も〇〇さんとこの犬をひどいめに逢はして巡查さんに叱られたんですの……

尻餅の泥のまんまで子は遊び



昨日着かへさしてやつた許りの着物をさ、尻を端折つたのは宜いが、三輪車の押しつこをやるんでせう、すべつて轉んだつて平氣の平左で、そのまゝ番の來るまで押して歩いて居るんですよ。何だつて三輪車を押すのですと云ふと借りるのに押しやるんだ押すのが悪るけりや買つて呉れですとさ。

食ひたいものは節をつけ子は唄ひ



さんぐく遊んでお腹がすくと、遠くの方から大きな聲で「何かア」でせう、まア其姿は何です、なんて叱つて見たつて感じませんのよ、お父さんがお歸りになつたら云ひつけますよ、それももう馴れつこになつてしまつてね……ねえお母さん……：美しいやんとこで昨日からおだんごを賣り初めたのよ、二本で三錢ですつて……

幼稚園一人すゝれば皆すゝり



それでも先生が恐いのですね、皆さんは御行儀が宜いのですから、お鼻の下が綺麗ですことつてやさしく云はれるのです、が云ひ合はしたやうに、しんとなつて、スー／＼みな鼻をすゝつてしまふんですよ。それがうちでは却々きかばこそです。下け手拭位は自分でお洗ひなさいと云ふと、裏返しにして誤摩化してしまふんでせう、しまひにはもとの汚ない所が出て來ても平氣ですの……

一心は筆入が鳴る授業ベル



豪儀なものですわね、學校へ上りますと、まるで性格が變つてしまひますわ。先生の仰有ることなら何でも素直に利くやうになるんですから有難いぢやありませんか、「さあ坊や、もう七時ですよ、お向ふの太郎さんなんかお顔を洗つて居ますよ」と臺所から聲をかけただけで飛起きるんでせうさうなると何だが可哀さう見たいな氣もしますの。

初めてのお客を子供只見つめ



全く學校へ行かないうちは困ることがありますのよ、外でさんざん腕白をして來ながら、お客さまがあるといやに人見知りをしたり、はにかんだり、お客様の顔をじろく見ては指を咬へて居るんでせう。先達などはお客様の菊石をじいと見て居て私の顔を見るんでせう、私の方が氣まりが悪くなつてしまひましてね...

江り込むやうに男の子の御辭儀



それがあなた、學校へ行くやうになると、御挨拶だけはちやんとするやうになるんですから、つくづく有難味を感じますわ、お客様の方だつて、チロくされて居たのでは、どう云つて宜いか判らないだらうと思ひます。だがお茶菓子欲しさうに見ながら立つて居られるのには冷汗をかくことがありますわ。

子の年を聞くも愛想の一つなり



大きくなりましたね、坊ちやんは何年生と聞かれると、直ぐ一年生ですと御返事が出来るやうになるのですから豪儀なもんぢやありませんかその代り遠慮がなくなつて、伯母さんの天窓のてつぺんはどうして禿けてんの...いまにうらのお爺さんの頭のやうになるの...なんて平氣でやられるには閉口しますわ。伯母さんも顔を眞ッ赤にして坊ちやんお利巧ね、は苦しい御愛想...

起きられる丈は起きてる子供の眼



夕飯を済ますと、晝間の疲れでせう、お蒲團を敷いてやるのが間に合はない程よ、さアお湯に行つて來ませうと云つたつて、ほんやりしてしまつて、トロンとした目と生欠伸ばつかりして居るんでせう。さうなると晝間の元氣は何處へやらです。何を云つたつて耳へも鼻へも入らないんですね。いつそ可哀さになつてしまひますわ。

桃太郎昨夜のところで又寝つき



それで居ながらお話ししてよくつてせがむから別にこれと云ふ珍らしい話でなく、毎晩同じやうに、むかしく或る所にお爺さんとお婆さんがと云つてやれば、それで安心したやうにすやく寝込んでしまふんです。寢たら最後どんなにしたつて判らばこそ、枕は番人ですわ、やつぱり疲れるんですね。

子の寝顔父しみぐと見入るなり



どうだ坊やは寝ちやつたのかつて、お父さんは御歸り早々いきなり寝顔を覗くんですけど、もうその時分はすうすう柔かな軒をかいて、鬼ヶ島の夢でも見て居るんでせう、まるで神様のやうな顔をしてね...それがまたお父さんには物足りないんですね「寝つく子を起して亭主叱られる」と云ふ川柳そつくりですもの...

鍵さきを御飯の時に見つけられ



日曜日なんかと來たら御覽なさい、朝御飯が済むと飛び出して、何所の子どもとどう遊ぶんだか寄りつきもしないでさ、それでも御飯時とお八ッだけは忘れなんですよ、只今つて聲をかけるのと、下駄を抜くのと、上るのと一緒なんですもの...手も足も眞ッ黒にして鼻の下はゴミだらけでせう。でも丈夫なのが何よりですわ。

夕焼の喉腺病質もチト唄ひ



夕方になると、何處から集まつて来るのか、露路口に一ぱい集つて、棒を持ったのや、輪を持つたので、一しきり大騒ぎなんでせう、それに子守どもまでも一緒に

衣更へ子供いきなり五寸伸び



去年少し長めにこしらへて置いたんですのに、どうでせう、揚げを下してもまだ短いんですよ、自分達が年を取つてくのに気がつかないで子供の大きくなるのばかりが目につくんですね、仕方がないからその着物は妹のに直してやるんですが、この頃では其妹が、あたい姉さんの着物ばかり著るのね、つて不足なんですよ、オホ、、、、

六年の算術に母チト困り



初めのうちはね、お裁縫のかたはら宜い加減に教へて居ても、どうやらその通りなんですが、だんだん難しくなつて来て、分數だの、最小公倍数だのつて云ふと、少し困りますわ、知らないと言へば親の估券にかかはりますし、と云つて忘れしまつて居るものを、急に思ひ出す譯に行かず、顔から火の出るやうなこともありますの。

分數のところで子供に侮られ



全くなんでございます、晩にお父さんに教はりなさいと一時胡麻化してしまふのですが、其實お父さんだつて、少し怪しい位なんですもの、しまひにはお父さんやお母さんが小さい時は、こんな難かしいもの

金の世の中

其譯へ子供は根掘り葉掘りなり



「お母さん微菌つてどんなもの『目に見えない程  
小さい蟲よ』目に見えない  
いつてどの位『どの位つ  
て分らない程小さいもの  
よ』それを千も萬も億も  
集めたら目に見える位に  
なるでせう』そりや判る  
さ』それぢやアどんなも  
の『煩さいねえ、この子は『やーい、大人の癖に  
負けちやつた』

紺がすりちゃんとして頼もしい



さんざ、やんちやを云つて困らした腕白小僧で  
も、教育と云ふものは恐  
ろしいものね、勉強が真  
剣になる、する事が何と  
なく目的づいて来るやう  
になるのですから、だん  
だん親の方が馬鹿氣て來  
ますものよ。『僕がいまに大きくなつたらお父さん  
やお母さんを大切にしますよ』なんて口ばかりで  
も嬉しいぢやありませんか。

...さて諸君...

敢て諸君と呼びかけねばならぬ程、多数なる金の欲しい諸君、定に金は欲しいものである。金さへあれば別荘も出来、男爵にもなれる世の中である。されば鵜の目鷹の目、金儲けに苦心する浅間し、これを丁寧な言葉では生存競争と云ふ。金なる哉、金なる哉でなくて何だ...然るに諸君...何と得難き金ではあるよ、一ヶ月三萬圓の月給取もあれば、二十五圓で毎日九時間の労働を敢てする小使もある。一分間に何萬圓の商賣をする實業家もあれば、一日一圓五十錢の賣上に甘じる駄菓子屋もある。奇なる哉金の世の中...



使つても溜めても金は面白し

どうだいお隣の禿頭は！ 此さき何年生きられる年でもないのに、ケチケチしてやがる。先達なぞは家の臺所を覗いてさ捨てるんならその鏝の頭を呉れッてんだ。鏝の頭に食ふところがあるかつたら辣味噌へ漬けて出しにするんだとさ、地所も家作もしこたま有る癖によ、ますますしみつたれて來るぜ。しみつたれには何でも金に見えると見える。

ガヤ／＼と惚れられて居る親の金



それに引換へて、悴の方が捌けて居るから五分だ、逆ラツバのズボンで、海老茶のネクタイ、オールバックのモダンボーイと云ふ奴だネ、取巻の藝妓に三越へ引張り出されて、あれもよし、これもよしと買物をさせられた揚句に、カフェーへ連れ込まれてさ、カクテルか何かで有頂天になり、銀座の眞中でおけさを踊つてるんだからな。

江戸ツ子の生れ損ひ金を溜め



あの調子で行くと、親父の目の黒いうちだけだな。第一友達がよくないや、出入の頭の悴と來て居るだらう、あの頭と來たら呑み助の怠け者で背越しの錢は江戸ツ子の耻だと云ふ舊式な傳法なんだからな、まア宜いさ、金は天下の廻りもの、有る奴がバツバと使つて呉れなくつちや、我々の方がたまらないや。その使ふやつがみんな俺のふところへ入るんだと宜いかな...



これ小判たつた一ト晩居て呉れる

鼠色の封筒を貰つて来る晦日の事を考へると、つくづく呪ひたくなるネ、米屋と酒屋と炭屋の通



帳で先づ半分は消えちまふそこへ家賃と来るだらう、公設市場へ運ぶ金が墓口の底にチョンビリさ、子供の月謝は宜いとしても、銘仙一反へ手をつけるにやア、幾月心掛ける事か、情けなくなるぢやないか。ああ、せめてもう五圓月給が上ればな...

子の貯金少し貯まつて親のもの

可哀さうに、田舎のお祖父さんや、神田の伯母



さんが来る度に二十錢五十錢と貰ふお小使を使ふんぢやないぞ、貯金しな、いまに大きくなつて大學へでも行くやうになれば物入りなんだからな、と云ふやうなもの、引越したと云つちや借り、醫者の藥禮だと云つちやあ借りさ...子供の貯金をあてにして生活するなんざあ少し器量が悪る過ぎるね...

貯金帳茲に年古る五十錢



いつの間にか五十錢残りだ、その五十錢だつて下けて呉れ、ば咽喉から手が出るんだが、御規則とあつては已むを得ずさ、まア好いや無盡でも當つたら返して置かうと相談だけは決めて置くもの、その頃になるとまた後が生れたりして、使ひ道の方で金の溜まるのが待ち切れなから堪らない。ホイ、家賃が一つ溜まつて居たな、この次のボーナスまで順送りか...

五圓札崩しただけでフツト消え



全くあつけないよ、先達の日曜なんか天氣はよし、久し振りだと云ふので、子供をつれて金のかからない遊山をしてやらうと思ひ動物園へ行つたものさ、入口でお剩錢を取つただけのことだと思つて居ると、家へ歸つて見りやもう無いんだ。考へて見ると圓タクと支那料理で溶けちやつてるぢやないか。もつとも生ビールを二杯呑んだがね...

どうてすと云へば儲からないと云ふ

と云つて恵まれないのは俺ばかりぢやない、Kの奴もSの奴も、後ろの減つた日和下駄で、懐手をしながらブラ／＼して居るんだが、何時逢つても、どうだいと云へば、判で押したやうに、何かうまい儲け話はないかつて云ふんだ、彼奴等もつく／＼貧乏の味を甜めて居るんだネ。肝膽相照らす筈だ、ヘツヘツヘツ



儲けづく乗り出す方は資本が無し

樺太の山林拂下けたとか、〇〇商店の約手だとか、賣家の周旋だとか、一つ旨く行けば五年も寝て居て食べられるやうな仕事を、大切さうに折靴の中へ入れて持廻つて居るが、彼奴等の手へ渡つて来るまでには、頼む方だつてさん／＼やつて見た揚句の事だ。それでもこれさへ旨く行けばつて、東京會館へ席を作つたり、待合へ連れて行つたりするが一向芽が吹かんやうだ。



大金を拾つた記事をモ一度見

何しろ一攫千金病にかゝつて居るんだからたまらないや、これが一つ當れば、ナツシユを買つて、郊外へ住宅を建築する。銀座へ事務所を置いて帝國何とか會社を建てる。夢のやうな熱に浮かされて、懐ろはピー／＼風車、そこらに一萬圓位落ことしてありやアしないかと、丸い目を三角にして歩く手輩だ。ヘン淺間しい奴らだ。尤も俺だつてそんな氣もしないぢやないがネ。



神妙にすれば他人に儲けられ

しかし、さう考へるのも無理はないさ。御奉公して置きさへすれば、何時か儲けさして呉れることもあるだらうと、一生懸命義理を盡して居れば、あてがひ扶持の水引だ。開けて見て腹の立つやうなこともあるが、何にしたつて金のある奴にはかなはないよ、長いものには巻かれろつて云ふ言葉は仕方なしに、諦める時の引導なんだからな。



掛取りに要らざる世辭と思へども

今月は何とかしてきまりをつけてしまふつもりで居たのですが、嬢が病ふ、子供が學校のものを買ふ、親類のお婆さんが死ぬ、と云ふやうな臨時費用に追まくられまして、どうも申譯ありませんが、來月こそ屹度何とか致します。そこへ持つて行つて區劃整理の方もまだきまりがつかんやうな始末なんです。どうもはや弱り目に祟り目で...



後はまた分別もある今日の金

それは判つて居ます。一時綺麗にお拂ひ致しまして、改めて一口御心配御願ひしたいと胸算用は立つて居るんですが、只今も申上げたやうな譯で、どうすることも出来ない始末です。何しろ今日の米にも困るやうな場合で、今も要りもしない反物を月賦で買つて、質屋へ持つて行つて遺線して來たばかりなんです。



成金を隣に持つて腹が立ち

漸く借金取のやつを追拂つてしまつたやうなものゝ、扱て明日をどうする。それに引かへて隣の奴はどうしたもんだ。朝つばらから蓄音機だ。それで午飯はお揃ひで出掛ける、晩は芝居だと云ふ騒ぎ、稀には人の身になつても見るが宜い、聞けば銀行の利息であんな贅澤をして居ると云ふ話なんだが、チエツ、いまいましてもなるぢやないか。



みな置いて行かねばならぬ金を溜め

それもみんな此方の愚痴だ、あいつの親父と云ふのは稼ぎもんだつたからな、夜どんなに遅く歸へつて來やうが、朝は五時つて云ふと起きて庭掃除だ朝飯が済むと割引へ乗つて出かける。何の商賣だか知らないが、朝の六時から晩の十二時頃までやつて來るんだからな、俺達に真似ろつたつて出來ない藝當だつた。だがかうやつて食ふと食はないの境ならやらねばならぬことではあるがさて口はなし



溜めた金溜った金へ溜まる金

さうして銀行へ運ばせる金なんだ、其金をまた

こきつかつて溜めるんだ

あいつ一日に何度銀行へ

運ぶか知れない。それで

あいつの云ひ草が宜いち

やないか、序ですが御用

はありませんかだとさ、

人を馬鹿にして居やがる、と云つて俺達にはどう

もならんから、甘んじて嘲弄されて居るより他は

ない。



出納課札の重しに札の束

でも、あるところにやあるもんだネ、先達一寸銀

行を覗いて見たら、あそこに居る社員なんか、札

を札とも思はないんだな、何し

ろ札束の中に埋つて仕事をして

居るんだからネ、オイ給仕、そ

この窓を閉めて置けッて、風が

邪魔になると見えて、數へてる

札の重しに百圓札の束を乗つけて置くと云ふ素晴

しさだ、「檜扇のやうに數へる出納課」と云ふ川柳

があるが、商賣とは云ひ乍らうまいもんだな。



銀行のピラ篋棒な數字なり

千里の道も一步より、稼ぐに追ひつく貧乏なし

小學校の修身で飽きる程

教はつた格言だ。今更ら

しくも無いと思つて見る

もの、一日一錢一年三

圓六十五錢位は、一寸考

へさせられるネ、それが十年経つと五百圓、二十

年で千二百圓、五十年で何萬圓、百年たつと恐し

く〇の澤山つく數字になるんだ、そんなに生きて

る奴は無からうがネ。



出納課二枚の札を二度數へ

と云つて、一枚でも間違つたら大變なことだ。

何百何千何萬と、ものの數

とも思はずに勘定して居る

やうなもの、銀行の金と

云ふ奴は、みんな他人の金

なんだからな、一枚不足し

ても失くしたからと云はれ

んし、念には念を入れての仕事だ、それで自分達

の月給を考へたら、つくづく心細くなるだらうと

思ふよ。



銀行であれが俺のならと思ひ



百圓札を井桁に封じた束が、山のやうに積んであるなんざア、どう見たつて素晴らしい景氣だ、みんなでなくとも宜いや、せめて一把か二把でもと思ふことがあるよ、あんなに一體、どこのどいつが預けやがつたんだらう有るところには有るもんだと感心するより、ゾツとする氣持と欲しい氣持で、頭先から足の先まで熱くなつちまふ。

元金へ這ひ上るよな利子がつき



それでもつくづく考へるネ、百圓の金を預けても、半年捨て、置けば雀の涙ほどではあるが、元金の隣りへ豆の蔓のやうに「利息」と云ふものがついて来るんだ。これが百圓だから一年に四圓五十錢だけれど千圓なら四十五圓で、一萬圓なら四百五十圓、十萬圓なら四千五百圓、百萬圓なら四萬五千圓と利息の方だけでも欲くなるぢやないか。

子寶を金に例へて淋しがり



まだ長男のときの借金が埋らないのに、もう後が出来てやがる、よく孕む嬢だと思ひながらも、どうせ俺達はこれより出世の出来る身分ぢやなし、せめて子供でも大きくしてやらなけりや楽しみはないと一生懸命稼いで居るやうなもの、育てる間は子寶どころの騒ぎぢやない、稼ぐに追つく貧乏神だ、何ごとも運命だ、仕方がない...

金の番ある夜の夢に噫される



しかし、ものは考へやうだ、金持金に使はれると云ふ譬へがあるが、俺達は自分の子に使はれて居るんだから、同じ無駄骨だつたらまだその方が諦められると云ふものだから無駄骨を折らせられるなんざア、寝ても寝つかれないことだらう、とまア云ふやうなもの、金に使はれる方が幸福らしい氣もする...少し位の心配をしてもネ...

借りに来た事情を聞けば無理がなし

同じ物入りつゞきでも、のつびきならぬ事情とあらば、考へて見ようと云ふ氣になる。なる程、



それも尤もだとなつたら有る奴から無い奴が融通受けるに不思議はない。其金が鐵砲玉になつたらつて、返せない奴の苦しさをより損をする奴の方なしで損ばかりする方になりたい。

小成金で済む氣のト盛り

何？ いけないつて、馬鹿云へ、金さへやりやア済むんだらう、幾何



だ、吝嗇臭いことをいふな、金が欲しさの狂言なんだ、馬鹿にするな、第一俺はそんな面倒臭い義理だの人情だのと云ふことが嫌ひなんだ。金なら金と卒直に云へば宜いちやないか、金ならいくらでも出してやる、人を誰だと思ふんだ。金さへやりやあ宜いんだらう。

勅選になりたい欲の筆頭

濟生會百萬圓、養老院に五十萬圓、郷里の學校



へ十萬圓、貧民救濟會へ十萬圓、とな、國家の爲だ、社會の爲だ、盡すだけのことをするのは國民の義務だ金は働けば出来るもの、御奉公はこんなときでなければ出来ない、さあ、もう金のいることはないか、無ければ俺の銅像を建てると云ふやうな身分に早くなりたいな...

◇いろくな金◇

當分は故郷で遊ぶ涙金金にして見れば淋しい家と藏あとは又分別もある今日の金小切手の壹百圓の也もよし百圓で剩錢だと大分酔つて居る米國の金貨を手から手へ見せる金を貸す方は大きい聲で云ひ奥へ聲かけるお剩錢は待たされるあきらめたのか請求書来なくなり受取りは取つとくものと勝ち誇り

- 南天
- 松窓
- 光太郎
- 柳路
- 半文錢
- 五葉
- 柴風
- 鶴亭
- 一年
- 盈先

◇これ小判◇

これ小判こはんたつた一トひと晩居ばんぐて呉くれろ  
妙薬めうやくを開ひらければ中なかは小判こはんなり  
貸かさぬ奴種やつしゆ々物入ものいりを云いひ立たてる  
金かねの番ばんとろくとしてうなされる  
江戸えどツ子この生うれ損そなひ金かねを溜ため  
お芝居しばいの小判こはん鉞ぶ力りきの音おとを立て

醉よつて  
如ごとく  
件こと

李白と云ふ奴はうまいことを云つたよ蘭陵の美酒樽金香とな、どうだい此山吹色の鮮やかさは、  
：玉椀盛り来る琥珀の光りか：うふッ、有難いな、なみなみと一杯、花間一壺の酒、獨酌相親しむ無しか、こんな時に誰か来ると素敵なんだがな。

いゝ上戸一ぱい飲むに腕を曲げ

と云ふ川柳があるが、斯うやつてなみくくと盃へ盛り上るところは李白でなくとも嬉しい色合だな、ヘンロの方からお出迎ひだ：：



晩酌や一人ちや惜しいぬたが出来  
何は無くとも愛妻の手料理だ、冷奴に蕨の薑味噌、遠來のからすみ、おつとぬたか、素敵々々、序にお銚子をもう一本、なに？  
そんなにメートルを上げちやいけないつて、馬鹿ッ、  
これで二デシリットルぢやないか、メートルまでは未だ大へんだぞ、ケチくするな。第一こんなうまい肴をこしらへるから悪いんだ。罪はそつちにあると云ふものさ。

酔へば寝る癖を他人に褒められる

なんのかんのと理窟をつけて誤魔化さうとなさるのね、そんなにも御酒がおいしいのかしら、二



デシリットルなんて口の廻らないやうな符牒まで覚えてさ浅間しいぢやないの！  
お向ふの御主人なんか御覽なさいな。一合足らずのお

いきせで御寝つてしまふんですとさ、あなたのはまるでリットル病に取つかれてしまつて居るんですもの。

神代より汁粉になつた瀧はなし



それやア少し暴言だぜ、養老の瀧の話を知つてるか、酒の好きな親を持つた貧しい柚が、何とかして酒を求めたいと天に祈つたら、瀧の水が酒になつたと云ふことだ、お前だつて忠實なる妻ぢやないか、酒の好きな主人を持つたら少しは天にでも祈る氣になつて呉れ。水瓶の水が理研酒位になるかも知れないぜ、いよう天晴れ貞女ッ：：



呑助の口實となる客が来る



やッ、これはく、恰度よい所だ、まアお上り  
今さんぐく皮肉られて居たん  
だよ。なに...? 茲だけで  
歸る...? 宜いぢやないか  
君だつて満更でも無いだらう  
下戸の標本と引き較べて論難  
されて居る僕の爲めに、一臂の力を貸して呉れ、  
酒を知るものは酒を知るものゝ爲めに辯すだ、ま  
ア上れよ。何は無くともさ、氣の合つた同志は話  
が肴だ。

取あへず差す盃は水を切り



君に勸む盃を拒む勿れ、春風人を笑ひ来る、桃  
李は舊識の如し、花を傾け  
て我に向ふて開く、とな、  
おいお代りだよ、冷奴に竹  
箸を出す奴があるか、あの  
海苔でも焼いて来い、なに  
...? 無い...? 無...?  
日のおひるに食べちやつた。佃煮は...? 澤庵  
のお禮にお向ふへ上げちやつた...? それなら  
何かさう云つて来な、珍客だ...

冷奴オットどつこいしよと挟み



梧桐の茂り、青簾 釣葱に風鈴の風、若竹に三  
日月、景物はすつかり整つ  
て居るだらう、おつと御馳  
走か、何だいそれは鯖の味  
噌煮か、なる程こいつはう  
まい洒落だ、みそにぞ夏の  
しるしなりか、時に先達の晩はどうだつたい、あ  
れから直ぐに歸つた...? 捉まつたらう彼奴に  
廊下をうろくして居たから、危ないと思つた  
よ。

あの時は嘘さと猪口を甜めてさし



いや無事だつたよ、僕も危険と思つたものだか  
ら、途中までは一緒に出たんだがね、小便のふり  
をして、ポストの陰へしや  
がんにやつたんだ、なにし  
ろあの酔漢を連れて歩いた  
日には、まるで謝罪役なん  
だからな、このあひだなん  
か荷車へ喧嘩をふつかけて居るんだらう、荷車に  
謝罪するなんか氣が利かなさ過ぎるからな。兎に  
角手数のかゝる代物さ。

酔拂ひ邪魔だと云へば邪魔になり



それに彼奴はひどい近眼なんだ、何しろ六度と云ふ猛烈なんだらう、それだのに酔つて来ると所構はずスタスタ歩くんだ、圓タクだらうが、電車だらうが遠慮も何もない始末さ、おい電車、俺を救助網の上へ乗つけて家まで連れて行けつて頑張るんだ、てこにも棒にもかかりやアしない。だからあいつは十日と同じ眼鏡をかけて居たことが無いから見給へ。

唇を甜める生酔チト凄



それで加之に亂暴と来て居るんだ、何時だつたかな、そらK君の送別會の歸りさ、郵便やに突當つて置きながら、怒つちやつてね、何の遺恨で人の胸ぐらを取るんだ、さア殺すなら殺せ、手前達にムザ／＼殺される俺ぢや無いぞ、サア勘辨が出来ねえてんだ。それで居て俺の額へ三錢貼るから俺の家へ届けろ！ だとさ。

切腹の型で生酔地へ坐り



だませどすかせど動かばこそさ、仕方がないから郵便やさんには體よく謝まつて、歸つて貰つたもの、今度は僕に食つてかゝるんだ、やいッ貴様彼奴とぐるだな、よしッ、そんなら俺にも了簡がある、サアどうにでもして呉れ、俺ア茲を一寸も動かねえぞ、見せしめの爲めに、鎗すくひを唄つてやるぞツてんだ。

釣銭を取るだけは知つてる酔拂ひ



それで居ながら、何もかも承知して居るんだから、尙更腹が立つぢやないか、急に袂を探り出して、先刻の勘定書は貴様が持つてる筈だ、釣銭はどうしたつてんだ、釣銭はあると云つたら、それで雀焼を買つて来い、折につめてお土産にしてな、だとさ、あきれちまふぢやないか。半分酔ばらひで半分しみつたれと来て居るんだから...

圓タクで歸る生酔首を振り

さう云ふ君だつて、彼奴の事ばかりは云へまいぜ、舌なめずりをしながら、目を据ゑちまつて生欠伸の連發ぢやないか、運轉手がどの邊ですつて聞くと赫ツと目を見開いて、通り過ぎちまつた町をうろく見て居るなんざア、醜態の限りだ。でも「おい、此處は何處だ、下ろして呉れ、俺は電車で歸る」はおとなしい酔ばらいだね。



酔つた翌日女房の眞似る耻しさ

全く醜態だよ、よくまアあんなで家へ歸つて來られますねツて云はれるんだ、全く其通りなんだ、自分でもよく家が判ると思ふ位だものそれよりか翌くる日になつて女房の奴と子供とで、酔つばらひの眞似をするんだ、消えも入りたき思ひだよ、あれが諷諷と云ふ奴なんだな。その時ばかりはもう決して酔ふまいと思ふがね...



二次會で聲は意外な人にされ

まつたくだ、君のは却々酔はないが酔ふと別人なんだからな、先達なんか三拳の呑みつこから始つてこんどは唄ひつゞけぢやないか、それだけなら未だ宜いが、裸踊りだらう、越中禪へ爛徳利をぶら下けて、猫ちやくくの踊なんか珍無類だぜ、これが平常謹嚴なる君とは誰だつて想像もつかんよ。酒をして云はしむれば君子は痴に等しとね...



紳士録酔へば踊ると書いてなし

そりやさうだ、僕は二三合行くと素敵に嬉しくなつちやふんだよ、しかしこれは只單に僕の性格がする醜態ぢやないんだぜ、かうして酒を發散させるところに保健の妙味があるんだ。その證據には大亂痴氣をやつた翌日は決して二日酔と云ふ奴に襲はれないんだ、敢て僕のみ發見ではあるまいが...



云ふ事を聞かぬ生酔木から落ち



さう云ふあなただつて人のことをづけづけ云へた義理ぢやありませんわ、御酒の上で踊つたり唄つたりするのは有勝ちですけれど、あなたのはそんなぢやないんですもの、石燈籠とお相撲を取つたり、木登りをしたり、この間なんか張板を持ち出して差し上げながら馳けてあるくんぢやありませんか、それは何の真似ですつて云つたら、飛行機の真似だつて云ふんですもの、馬鹿馬鹿しいつたらありやしない。

同情のない針巻は二日酔



だからいつも登くる日になつて、からだか痛いのが苦しいのと云つたつてしみぐし介抱して上げる気にはなれないんですもの、ものには程と云ふものがあるんですのに、あなたのは底抜なんですもの、そんなに召上つたら明日が思ひやられますよと、眞身體の爲めを思つて申上げても結局誤解して、恐ろしい目つきをしたり、鼻の両側に深い皺を作つて、酔つちや居ないぞと云ふ事を見せる爲めに、鼻をかんだりしてさ。

改めて坐る生酔膝を出し

僕は不愉快だぞ、何が樂しみて働いて居るんだと思ふんだ、ともすれば首になりさうな勤めをして居る僕の壽命を何で引伸ばして居ると思ふんだ酒あればこそぢやないか、癪にさはる課長や、氣むづかしい局長の機嫌を取つて、僅かばかりの俸給を貰つて来るのは誰の爲めなんだ、みんな貴様達の爲めぢやないか、して見れば酒を呑んで壽命を伸ばして居るのは、俺の爲めぢやない、貴様達の爲めなんだ。飲みたくも無い酒をさ...? 何それはいまいさ、こたへられないほどまいさ。

泣上戸あんな事にもしやくり上げ



それを人の顔さへ見れば酒を呑むな、酒は毒だとぬかしやがる、俺はそれを聞く度にぞつとするんだ俺だつて好きこのんでの酒ぢや無いぞ、せめて勤め先の鬱憤を酒で消して、お前達に笑ひ顔を見せてやりたいばつかりなんだ、人の氣持も知らないで、やれお向ふの主人はどうのお隣りの亭主はどうのつて、まるで俺を型なしにしてしまふんぢやないか、俺はつくづく死にたくなつちまふ。

生酔のうしろ通れば寄りかかり



そんなにしんみりした話をして居るかと思ふと女中共にからかつたり、猫をつるし上げては喜んでだり氣狂ひ水とは云ひながら、かうも人間が違つてしまふものかと呆れちまふですよ、それも宜いんです、けれども本性違はずと云ふ言葉がほんとうなら、女中共を追廻はす時などは、淺間しくなつてしまひますわ、目尻を下けて、口を開いてデレデレした顔をしてさ。

座蒲團をかけて寝て居る酔倒れ



漸くのことに寝かしつけたと思ふと、胸ぐるしさうに寝返りを打つて唄と軒の合唱と来るんでせう、腹が立つちやありませんか、汐吹のやうな顔へ汗ばんで正體なしに寝て了ふのを見るとこれが私の夫かしらと思ふこともあるんですの、それでも風でも引かしたら思ふから、有りつたけの座蒲團をかけてそつとしたまゝ番をして居る身になつて下さい。

酔ざめの水に届かぬ手が寒い

それが二、三時間も経つとケロリとした顔をして、水だくと仰有るんです、水はフラスコへ入れて枕元に置くんですけど、寝ほけ眼で、そこいら中探り廻して、さもうまさうに召上るんですよ「酔ざめの水千兩と値がきまり」だとか「酔ざめの水のうまささは下戸知らず」だとか酒蛙々々したもの、よくまあ、あんな空々しく酔がさめると思ひますわ、しかつめらしい顔をしてさ、その時こそはほんたうに何とか云つてやりたくありませんのよ。

◇氣狂ひ水◇

借金が何でこわいと飲んでさし生酔の無理にはさうさうなりもう駄目な酒は柱へよりかゝり熱爛は鼻が動いただけで置き數の子が奥歯から出る二日酔足の毛を引けば生酔よせーやい酔ばらひ慘つたらしく蚊に食はれ酔どれが立つと逃げ出す人集り感心をして盃を下に置き生酔をだまし疲れて腹が立ち

- 一八
- 狂句堂
- 茶々朗
- 夜叉郎
- 香氣坊
- 鯛坊
- 紅太郎
- 市坊
- 柳香
- 螢石

女  
房  
同  
士

あら、まあお珍らしい。よくお出掛け下さいましたこと、どうぞお上り下さいまし、私の方からお訪ねしなければなりませんのに、恐れ入ります



さあどうぞ、お嬢ちゃんも御一緒...? まあ、お身大きくなりませんでしたこと、お上り下さいましよ、主人ですか

...主人は此處ずっと旅行なんですの、ですからどつこへも伺はれませんのよ、今日はゆつくりしてらしつても宜しいんでしょ、いろくお話しがたまつてますのよ。さ、ま、どうぞ...

女同士玄關先で「トク」さり

まあ、しばらく...御機嫌よろしう、先達は、



態々お使を有難うございました。生憎と私伺はれませんでした。残念でございましたわ。山姥が大へん結構でしたつてね...よし足曳の、

...あの出からして素敵ですわ...あ、それに結構なものを澤山に...いえ、え宅はあの鹿菜が大好物なんですの...あらお嬢ちゃん今日は...い、お衣着て...

女同士、あんな事にも又お辭儀

あら、お當て下さいましよ、お召物が汚れます



から...、子供が多いもんで、畳が直ぐだいなしになつてしまふんですよ。御覽下さい、

障子や襖まであの通りなんですもの...もうやんちゃで仕方がありませんの、散らかした玩具をかたづけると今度は雑誌を持つて来て散らすでせう。い、え今しがたまで大へんな騒ぎだつたんですよ、家の中で汽車の真似なんですもの...

いたづらを愚痴にして子の自慢なり

お健康で結構でございますわ、私も早くお伺ひ



しなければなりませんけれど、これが少し具合が悪かつたもんですから、つい御無沙汰してしまひました、これはあの、何かと思ひましたんですが、坊ちや

んに、これはつまらないもんですが、昨日郷里から届きましたから、ほんのお裾分けなんですよ、これは先達伺ふつもりで銀座で何したんですの。

風呂敷を解きく話すのも女

まあ、いつもく相済みません、こちらからは  
何もしませんのに...！ さあお嬢ちゃん、お菓



子、どれにしませう、  
チョコレート...？？ピ  
スケット...？？この銀  
紙のが宜いでせう、お

となですこと、まあ結構なりボン...！ どなた  
に買って頂きなすつたの、お母さん...？ お父  
さん、さうですか、宜いお父さんですこと。さあ、  
こゝへ来てお坐んなさい...

とめどなく女の世辭は手繰るやう

あなた、お羽織をお取り遊ばせな、今日はよろ  
しいんでせう。今に佐藤さんの奥さんもお見えに



なる筈です、御主人は  
...？ 當直...？  
そんなら宜しいぢやあ  
りませんか、今おすも

いでもさう云つて來ますわ、それともお饅にし  
せうか、どつちかさう云つて下さいましよ、もう  
此邊は不便で何にもございませぬの...あ...洋  
食にしませうか、

もてないは先づ食ふ事の女客

して見ると女なんて云ふものは、食慾とお喋舌



だけで生きて居るものらし  
い。これで贅澤と嫉妬さへ  
なかつたら、世間の夫達は  
どれ程安心するか知れない  
のにダイヤだの丸帯だのと  
ねだるものが大き過ぎるん

だから、亭主の節約なんかおつつきつこがない。  
善良な女性に嵐の中の港だと云ふが、斯うした女  
性は港の中の嵐だと云ふたとへがある。

お互ひの主人を褒める女同士

ほんたうにお宅の御主人はよくお氣が付きます  
わね、私んとこなんかぢや、こつちから催促した



つて、坊やの帽子一つ  
買って來るんぢやない  
んですよ、それで居て  
自分ばかり、いや交際  
だとか、社用だとかで

満足に歸つて來る日なんか殆んど無いんですの、  
ですから偶の日曜なんかには、子供達を預けて追  
ひ出してやるんですよ。



御主人を配下のやうな女房同士



でも、御宅の御主人はお柔しうございますわ、宅  
なんか家に居ると氣む  
づかしくつて肩が凝る  
んですよ、それで外だ  
と宜いんですつてね、  
ですから、此子なんか  
父が笑はうもんなら珍  
らしがつて大騒ぎなんですよ。まあ御主人と云へ  
ば佐藤さんの御主人位よく出来て居らつしやる方  
は有ませんわ、先達も奥様と三越でせう...

女同士諦めるにもケチをつけ



ですからお宅の御主人はお柔しいと云ふ評判で  
すわ、あなたお幸福よ、私んとこなんども、子供  
は可愛いと見えて、旅行  
さきからはいろんなもの  
を送つてよこしますのよ  
それに大抵なことには怒  
りませんの、家庭の平和は心の成金だつて、随分  
無理なことを云つてもヘラ／＼笑つてばかり居  
んでしよう、稀には刺戟的に叱られて見たいやう  
なこともありますわ...

女同士羨ましがり悔しがり



それもお子さんが無いからでせう、ですから御  
覽なさいなああの派手さ加  
減を...お宅になんかい  
らつしやると、それはそ  
れは大へんなんですのよ  
齒が浮くやうな御機嫌取  
りなんですもの、其處へ  
行くと私なんか子供が多いから、時によると夜  
分などは子供と一緒に先へ失禮しちまふんす  
もの。

随分なことまで話す女同士



もし夫れ誰かに聞かれたら、屹度顔を眞ッ赤に  
するであらうところまで  
打解ける女同士の話は天  
下泰平である。彼等は自  
ら憤激し、自ら慰め、さ  
うして自ら誇るところの  
神経を何本も所有して居  
る。幸福なる哉女性、恵  
まれたる哉女性達、そして彼等の青春は傍若無人  
に闊けて行く。

温まる薬に女同士淋し



吉奈の湯が大へんよろしいつて話ぢやありませんか、佐藤さんの奥さんは、去年五色の湯とかへ行つたんださうですね、あそこも子供の出来る湯とかで有名なんですとさ、お互に年ですわ、何でもおんばこの薬を蔭干しにして持薬にするよと腰が冷えないさうですよ、田舎の母なんか、十薬に交せてお茶の代りに呑んで居ましたが...服み難くも何ともありませんよ...

腰蒲團どうも仕方がなく笑ひ



あ、もう五時ですのね、とんだ長居をしてしまひましたわ、いゝえ洗濯ものを干しつばなしで来ましたの、また伺ひますわ、あなたもちとお出かけなさいましな、おぐしなんかどうでも宜いぢやありませんか、でもあなたのは毛が多いから結構ですわ、私この頃眞中の禿がだんく大きくなりますの、悲観しちまいますわ。

女客 歸る支度にちと慌て



どうも、いろく有難うございました、こんど打合して銀ブラでも致しませうよ、お互ひにくすつづつてばかり居たつてつまりませんわ、御都合のよろしいときお電話を下さいますな、いえお隣りの米屋さんで取次いで下さいますの、それつてば、あなた先達の子猫、どう遊ばしまして。もし何でしたら私の髪結さんどこでまた可愛いのが四つ生れましたわ。

左様ならをしてから女また話し



あッ、さうく私大切な用をすつかり忘れて居ましたわ、先達お立替へ下さいました染物屋さんの御勘定、いくらでしたせう。いゝえまたつて忘れると不可ませんからお拂ひしますわ今日はそれでお邪魔に上つたんですもの。僅かですつて取つて置いて下さいませよ、私困りますわ。さうして頂きませんと今度御願ひが出来ませんもの...

温 泉 場 小 景

墓口を出すのに女むかふ向き



さあ歸りませう、伯母ちゃんに左様ならをなさい、何です立つて、そんなお辭儀つてありませんよ、伯母ちゃんに、宅へもちといらして下さいつて、帽子を忘れちゃいやよ、それでは御免下さいまし、ほんたうにお出掛けなさいましよ、何時かの味噌漬がまだありますわ、先達田舎から澤山送つてよこしましたの茄子のも一寸結構ですわ。ではこれで失禮致します。小母ちゃんにはいやいやひなさい。

女客待遠い子を肯んぜず



うるさい子ね、もう歸るんですよ、それでは御免下さいまし、さあ、お前さん先へお出なさい、あら、またお手々を口へ入れちやいや、お行儀の悪い、御免下さい、どうでせう此姿、大した姿でせう洗ひ髪なもんですから、昨日結つたのに、もうこれなんですよ。ほんとに子持は嫌になつちまひますわ。  
言譯けをしいく女身繕ひ

今年(ことし)は一つ山(やま)へ出掛(でか)けて見(み)やうぢやないか、僕(ぼく)も胃腸(いちょう)を少し(すこ)しやられてゐるし、坊(ぼう)やは扁桃腺(へんとうせん)を取(と)つたばかりだしそれにお前(まへ)も腰(こし)が冷(ひ)えるくと云(い)つて居(ゐ)るしするから、温泉(おんせん)と決(き)めやう、山(やま)のふところ(ところ)に聞(き)く水音(みづね)は又(また)格別(かくべつ)だ。避暑(ひしよ)になつたり、養生(じやうじやう)になつたり、賢明(けんめい)な方法(ほうほう)だらう。何(なに)? 不(ふ)便(べん)だらうつて……大(だい)丈(じやう)夫(ふ)だよ。今(いま)はどこでも自(じ)動(どう)車(しゃ)が利(き)くから……

温泉(おんせん)の相談(さうだん)うれしそに迷(まよ)ひ

……海(うみ)つたつて、お前(まへ)泳(およ)げないぢやないか、坊(ぼう)やの方は廣(ひろ)くつて遊(あそ)び宜(い)いかも知(し)れないが、耳(みみ)へ水(みづ)でも入(い)れると大(だい)へんだぞ……

子(こ)の出(で)来(き)る湯(ゆ)へ女房(にようばう)はムキになり



それは温(あ)まる湯(ゆ)なんだよ、何(なに)? 胃腸(いちょう)の悪(わる)い人と、扁桃腺(へんとうせん)の悪(わる)い人と腰(こし)の病(びやう)氣(き)の人(ひと)と一(いっ)緒(しょ)に入(はい)つてどれ(どれ)へも効(き)くかつて……少(す)しへんだなそれが温(おん)泉(せん)の有(あ)難(がた)味(み)なんだ。吞(の)み薬(ぐすり)でそんなに効(き)くのがあれば賣(う)れらだらうつて……? ウフ、う、それも理窟(りくつ)だ。お前(まへ)もなかく商賣(しょうばい)氣(き)があるね……

分析(ぶんせき)で見(み)ると温(おん)泉(せん)醫(い)者(しゃ)いらす



何(なに)しろ此(この)分(ぶん)析(せき)表(へい)を見(み)て御(ご)覧(らん)、ラヂウムが一(いち)〇五(ご)マツへあつて、クロールが多(た)量(りやう)、アルカリ(アルカリ)が幾(いく)ら、鹽(えん)分(ぶん)が含(あ)まれて苦(く)味(み)があり、硫(りゅう)酸(さん)が若(わか)干(かん)あつて、沃(えき)度(ど)が痕(こん)跡(せき)、曹(そう)達(たつ)分(ぶん)があつて芒硝(ぼうせう)があるつて云(い)ふのだらう、まるで薬(くすり)屋(や)の倉庫(くらぐら)へ入(はい)つて居(ゐ)るやうなものだ、辛(から)抱(だ)してじゆつと入(はい)つて居(ゐ)て御(ご)覧(らん)、そのどれかには屹(きつ)度(ど)ぶつかるよ。

温(おん)泉(せん)へ親(おや)子(こ)、子(こ)は子(こ)のバスケツト



坊(ぼう)やのものを忘(わす)れないやうにな、瀬(せ)戸(と)物(もの)の金(きん)魚(ぎよ)に水(すい)雷(らい)艇(てい)、水(みづ)鐵(てつ)砲(ぱう)は嵩(かさ)ばる(は)るから置(お)いてくとして、その代(か)り飛(ひ)行(かう)機(き)を持(も)つて行(い)つてやらう、オット寢(ね)冷(ひ)知(し)らずは洗(あら)ひ替(か)げないと困(こま)るよ、キヤラメルに譚(たん)海(かい)、と、タオルはこつちへ一(いっ)緒(しょ)で宜(い)ぢやないか、それで一つのバスケツトが満(まん)員(いん)だ、これでも一(いっ)ぱいつめると一(いち)寸(すん)重(おも)たいよ、持(も)つて行(い)かれるかい……? ヘエこれは坊(ぼう)やの……

汽車が動き出すと坊やは何か食べ



なんかつて不可ませんよ、あつちへ行つてからのよ、今御飯を食べて来たばかりぢやありませんか、母さんは何にも持つては居ませんよ、みんなバスケットへ入れてしまひました。夏蜜柑...？まア目が早いネ、それぢや半分ですよ、一つは多ござんすよ、お腹をこはすといけませんから...ネあゝあ、お膝を汚しちやいやよ。

熱海迄遠出氣取られまいとする



おいあれを見て御覽、御夫婦と見えるかい、あの襟元が只ぢやないネ、ときく鬢の毛を気にする手つきを御覽...ネ、...あれは今日から明日までの丸鬢だよ、土曜から日曜へかけての御夫婦だ。ほんたうの妻君こそ宜い面の皮さ、今日は社用で出張だなんて云つて来て居るに相違ない、あいあい社用でございか。

自動車へ温泉宿の二階首が生へ



みんな退屈なんだネ、まるであの二階三階の人達は、俺達の自動車を奉迎して居るやうぢやないか。湯に浸つてじつとして居ると、かうした活動的な刺激に感じるんだネ、見て見ると大變な人達だ、これがみんな胃腸が悪かつたり、腰が悪かつたりして居るんだと、薬が薄くなりはいしないかしら、あれ御覽あんなお婆さんまで来て居る...

まづ入る温泉に長々と生伸びる



やれく有難いな、勿體ない程な温泉だ、これが東京の真ん中にあつたら豪い金儲けだらうな、どうも此温泉と云ふ奴は家の風呂と違つて肌ざはり別だよ、お前もよく温まんな、大丈夫だ、上氣やしないよ。さう思つたら腰だけ浸つて居れば宜いさ、氣まりの悪いことはないよ、大感張りで温まりな、子が出来るかも知れない、アハツハツハ...

疝氣持しみくらしく湯に浸かり



あの人を御覽、耳までつかつて願を出してゐるだらう、あれは神経痛か疝氣だぜ、しみく癒らうつて云ふんだネ、温泉もあの位信用して入つて居れば吃度効くネ、この温泉と云ふ奴は妙なものだよ、ぬるいやうでも、上ると汗がだくく出るんだ、それが効くやうに考へられるんだ。「平常の氣持に欲しや風呂上り」…か、宜い湯だね。

透き通る温泉に恥しい膝を立て



あッはッはッは恥しいんだネ、この湯はまた綺麗過ぎるんだ足の先まで透き通るんだもの見て御覽、足の指がベタンコに見えるだらう、温泉の綺麗なのは健康の人には氣持が好いが、病氣の人には具合が悪いんだつてネ何だか白湯に入つて居るやうな氣がして、効くやうな感じがしないとさ。これでも嘗めて見ると味があるよ。

中氣病み草津を貶し那須で愚痴



然しいくら温泉が効くつて、半身不隨を元通りにしろと云ふのは少し無理だよ、けれども、土地の人に聞くと、癒つて歸つた人があるんだとさ。一人が間拍子で調子がよくなつたからつて腦充血が元の通りになる位なら、電氣もマッサージもあがつたりだ。だが、無理もないさ。あの醜態でこんな山奥まで癒りたい一心なればこそなんだから…

通をいふ婆ア此温泉へ五年來る



いゝえあんた此湯は慥に効きますよ…私はず毎年夏になると此湯へ来て居ますがネ、癒つて歸る人が随分ありますよ、しかし皆さん辛抱が足りませんのでネ。わたしなんか初めの年は黄痘で四十日居りました次の年は寸白でね、三十日程居りました、目に見えて宜いですよ。それに温泉に一夏這入りますと冬になつて風邪を引きませんから豪氣なもんです。

湯治場で伊達巻の妻それよし



どうだ清爽したらう。湯上りの気分はまた別な  
もんだ、まア其儘少し涼め  
よ。別にお臺所をすると云  
ふ譯ぢやなし、宜いさ、食  
べものは女中まかせ、夕飯  
が済めば蒲團を取りに来る  
こんな時でものうくする  
さ、買物に行つて来る、……？ その儘で宜いさみ  
んなそれなんだから構はないよ、浴衣に伊達巻ち  
よつと宜いもんだよ。

出養生女中タオルを持つて付き



は、ア病後だな、チブスかなんかの豫後だぜあ  
の人は、恐ろしく瘦せちやつて居るぢやないか、  
ステッキと云ふよりは杖  
だネ屹度元湯かなんかへ  
行つて来たんだな、あぶ  
なつかしい足取りで……銀ブラをすると一時間幾  
らといふステッキガールがあるが、タオルを持た  
したステッキなんか下さらないな、しかしあれが  
はつきりして来ると、先刻の婆さんのやうに、宣  
傳黨になるんだらう。

由来記に依ると此温泉も行基なり



行基菩薩と云ふ人は豪い人だつたんだネ、何し  
ろ山は役の行者、温泉は  
行基菩薩と相場がきまつ  
てゐるんだから……今と  
違つて汽車も自動車も無  
い時分に、よくまアあんなに歩けたもんだ遠くは  
北海道九州、近くは箱根鹽原に至るまで、温泉は  
行基菩薩として置けば間違ひのないところだ、こ  
れが一々権利がついて居るとしたら行基菩薩なん  
か、日本一の成金さんだらう……

水音と河鹿で温泉町寝静まり



まるで雨が降つて居るやうですわネ天井が漏る  
やうな氣がして寝つかれせんわ。は、かりへ起  
きて見ると外は素敵な  
月夜なんですの。床が  
變つて目が冴えて来て  
ゐるところへ持つて来  
て河鹿が遠くの方で鳴  
くんですもの、何だか淋しくなつちまふやうな氣  
がしますわ、電車の音が聞える譯ぢやなし……こ  
れでも二三日したら馴るかしら……

温泉で母這入らねば損のやう



また、這入るのかい、毒だぜ、そんなに温泉にばかり浸つて居ちやア  
しまひに身體が溶けちやふぜ、なに：：：？  
いくら入つたつて湯銭は同じだつて：：：？  
うふつ宜い加減にしるよ、あがつて來てはがつかりしてゐるぢやないか：：：そんなに一生懸命にあつたまつたつて、家まで持て歸れやしないぢやないか。

父さんは寝てばかりゐる温泉場



でもあなた、お湯にでも這入らなければ退屈な  
んですもの、ねえ坊や：：：？ お父さんと來たら、御飯を食べちや寝、お湯から上つて來ちや寝お父さんこそ眼の玉が溶けてしまひますわ。お天氣のよい時位は、その邊でも散歩して下さると、宜いんですけれど、坊やだつて可哀さうですわ、ねえ坊や：：：！ 退屈ぢやない：：：？ お母さんとお土産でも買ひに行つて來ませう。

今食つたとこへ塗板うんざりし



あら、もう晩の御飯：：：？ あなた晩のお仕度ですつて、何を召上ります。  
おわん、おさしみ、甘鯛の照焼、親子煮、海老しんじよ、ほうれん草、ピフカツどれにします。お前の食べるものつて：：：今お晝を頂いた許りで晩の感じが出て來ませんわ、あなた定めて下さいよ。この吉野揚つて云ふのをそいつて見ませうか、ねえあなた、きめて下さいましよ、あたし干物が頂きたいわ。

湯治場の雨雨親が子と遊び



さア坊や五目並べをやらうか、なに：：：？ お前も入れて呉れつて：：：馬鹿ッ、五目並べは三人でするものぢやないよ、なア坊や、お母さんが淋しがるから厭だつて：：：こいつお母さんびいきをするな、よーし、それでは三人でやれるのをやらう、何が宜いな双六はお正月のやうで面白くないし、此雨ちやぶらんこへは行けないし、ジャンケンにしようか、お父さんは石ばつかり出すから駄目だつて、うふッ、こいつは大失策だ。



雨の宿廊下の子等がうるさすぎ



ほんたうに仕やうのない子供達だ、縁側を雨天  
體操場と心得て居るんだ  
から始末が悪い、ほう何  
處かの部屋で叱られたら  
しいな、それだのに直ぐ  
あれだ、おい姐さん番頭  
さん何とかして呉れない  
かな、本も新聞も讀めやしない、さうく之れを  
梯子段のところへ貼つて呉れ、廊下で騒がないで  
下さい」と！ にももう三枚も貼つてあるんだつ  
て...チエツ、今度騒いだら殴りつけるぞッ。

休職の湯治諸をまた初め



子供達も子供達だが、お向ふの謠にも惱まされ  
るな、橋辨慶だな、やる  
ことは大袈裟だが、唸る  
方がまづいんで閉口だ、  
何しろ食つてる時と湯に  
行つた留守だけ助けられ  
てるやうなもんだからな、休職の軍人さんか停年  
の官吏といふところだらうが、ようッ橋がよりと  
おいでなすつたネ、あッ、がっかりさせられちま  
ふな、おい枕を出してお呉れ...

湯治客お裾分けから名乗り合ひ



御免下さいまし、あのう向ふ側の〇〇番でござ  
いますが、只今東京からこれ  
が届きましたから、失禮では  
ございませうが、坊ちゃんに差  
上げて頂けませんでせうか、  
ほんたうに斯う雨ばかり降つ  
て居ては、退屈で困ります、  
ちとどうぞお遊びにいらしつて下さいまし、私共  
でも年寄と二人きりなもんですから、退屈で仕方  
がありませんの...

知合が出来て湯治湯場を忘れ



「どうです、お湯に行きませうか」あッ恰度好い  
ところですよ、お茶が入りました  
まアどうぞお這入り！ 漸くお  
天氣になりましたな、此の分  
は直りませう、それと云へばあ  
なたの向側の人は何です...？  
女の人一人ですな、哥澤の師匠  
ですつて、さうですか、どうも素人ぢやないと思  
ひましたよ親指は...？ 先達来て歸つたんです  
つて...？ お妾ですか...

恋をする頃

温泉場按摩圖タク程歩き



煩さいなほんたうにピーくく、なんて按摩の多いところだらう、夏場だけ稼ぎに来るんだらうな、それにしても多過ぎるぢやないか、長くない温泉町をあつちへ行つたり此方へ来たりまるで夕方の赤蜻蛉だネ、あれ御覽あの按摩め三度も行つたり来たりしてあぶれたのに、自棄を起したと見えて安來節の笛を吹いて来るぜ。はつはつは按摩の就職難か...

鐘詰を呉れて湯治場暇乞ひ



どうも永々御厄介様になりました。お蔭様で退屈なしに湯治が出来ました残り物で失禮ですが、まだ口を切らないので御座います、召上つて下さいませお歸りになりましたら是を御縁にチトお遊びにいらして下さい〇〇停留場から直ぐで御座います、私も御邪魔さして頂きます。いえ、私はもう少し居ても宜しいので御座います、坊やがもう飽きてしまひまして...

静けさに居て淋しさの膝を撫て

恥かしいことだが仕方がない……紅さしかけた  
櫻花の苔、浅翠の風に縫れる柳の絲、音も無い春  
雨に漏れる連翹の惱み……かうした景物の中に明  
けて行く春曉の小半時、襟元に恵まれたやうな天  
鵝絨の感觸、うつゝとも無く夢ともなく、幻影を  
趁ふ瞳は、心臓の鈴を押して、傍から見られたら  
私の頬は紅いかも知れない。

華やかへ眩しき眼ふり戀心  
これがそも戀てふものか早い脈

春の夜や人に話せぬ夢ばかり



清澄な戦慄、それは若き日の追憶からの昂奮で  
あつた。幼い友達であつ  
た彼女、まゝ事のお母さ  
んであつた彼女、學校の  
行き歸りにも、芽花を抜  
いたり、けんけを摘んだ  
りして懐かしい友であつ  
た彼女の顔を、しげくと見つめることが出来な  
くなつたのは何日頃の事だつたか、慕はしさ、懐  
しさにときめく心、怪しからん心持だ……

そんなこと存じませんと鶴を折り



随分遠慮のない友達だつた彼女なのに、他所他  
所しくなつて来たのが不思議  
だ、彼女にも何か云ひ知れぬ  
意識が湧いて居るに相違ない  
これは不可い、これがお互の  
戀なんだ、いやはつきり戀と  
判つてやしない。もしさうだつたら二人は理解し  
合つて、軽卒な戀なんかしてはならないんだ。と  
思つたところで彼女は何も云つて呉れないんだ。  
どうしようもないや。

襟足を見て来るだけの戀なりし



彼女も何か云ひたけだつた。それなのに殊更ら  
しく拗ねたやうに、物  
足りない素振りを見せ  
て居る。私の心臓を見  
てお呉れ、さアお前の  
手で私の魂を探つて  
御覽、彼女の手を執つ  
て内懐ろへ入れてやり  
たい氣持だけで、こわばつてしまふ口、何と云ふ  
怪奇な心臓なんだらうまたしてもときめきた。

読んでまた読む戀文をまた擴げ



惱ましい心と詩にある。うつろなる心と歌にある。それが戀なら私の心は判然戀と云ふものに捉はれてしまつて居る。送つた手紙に桃色の用箋、彼女にもさうした惱ましさがあると云ふ、さア大變なことになつてしまつた。しかし嬉しい、彼女の心は打明けるべく私のそのやうに、土塊を芽ぐむ物種だ。いきなり花にはなりさうもない。それが戀と云ふものかしら。

藝術のやう物足らぬ戀を知る



戀の體驗者は戀を立派な藝術に扱つて居る。我御當人に取つては少し廻りくどい、率直に表現する何か無いだらうか 藝術的な戀は涙が要る 涙なしに嬉しい二人の 心持を、高らかに唄ふ ことは出来ないだらうか、野道を往來したお河童さんと海軍帽、そのまゝ戀の唄をうたいたいな。それが藝術的なんだらうか。

子を抱けば男にものが云ひやすし



ほうら、他所の伯父ちゃんよ、今日は？ 伯父ちゃん今日はお休みですかつて、ねえ！ 宜い伯父ちゃんでせう、伯父ちゃん坊やが大好きなんですつて、好いでせう、何處かそこらまで散歩して來ませうか、小父ちゃん待つて頂戴よ、坊や萬歳をして上げますから、そら、ニギくも おつむてんくも出來ますよ、そら待つて、そら待つて...

抱いた子に叩かせて見る惚れた人



あら、小父ちゃん、もつとゆつくり歩いて下さいな、邪慳ネ！ 小父ちゃん随分意地悪よ、坊やを置いてきほりするなんて、待つて頂戴ツて、お馬鹿ちゃんネ、小父ちゃんのお馬鹿ちゃん、ぶつておやり、坊やがこんな後に追つて居るのに、小父ちゃんは嫌ひなんですかつて...うぬしてやんなさい。

ありたけの智慧を絞つた戀てあり

逢ふことが何となく嬉しい二人である、坊を連



れ出したり、犬を連れて  
藝をさしたり、そして晴  
々とする二人だが、お互  
に打解けられない惱みだ  
けは、どう云ふ機会に云  
ひ出したものか、これが二人の謎だ、觸れたとき心  
と觸れまいとする心が、稻妻のやうに往來する、  
いつそ思ひ切つて云ひ出さうか、云ひ出してそれ  
が終りになるやうでは...

逢つたらばうんと云ふ氣て又別れ

どうしても云つてしまはなければならぬ。今  
度逢つたら之れだけは、どうしても話して置かう。



もし後で、それなら早く  
云つて下されば、私だつ  
て云ひたいことも有つた  
のにと、云ふやうな事が  
ないでもない。さう思つて逢へば只徒らにときめ  
く心だ、全身を急速度で廻轉する血のひき、何  
と云ふ淺ましい魂のおびえだらう。私も男だ今度  
こそ...此のつきこそ...

握られた片手疊の毛をむしり

實に昂奮させられてしまふ。白百合のやうな頸



を垂れて、黒目勝ちな睫毛の  
長い、そして夢を趁ふやうな  
肩から乳へかけての線、ノー  
ブルな鼻、薔薇色の頬、それ  
が彼女の魅力なんだ、何もか  
も云ひ出すべき機会さへも與へない神秘だ、私の  
息ははずんで来る。私の心は、そして私の告白す  
べき一切のものは、もう無い、彼女の指先きに觸  
れた私の指...そして彼女は？

笑ひ合ふ鏡臺の顔俺の顔

そして何もかも解決されて行く戀だ、戀なんて  
云ふものはベラ〜喋舌り立てるものではない。



彼女の魂と私の魂と  
が結びつく機会は領收  
書と引換へる現金のや  
うなものぢやない。私  
の胸には何かなしにスーツと消えて行くものがあ  
る。昂奮と緊張とはさうして解決され、そして更  
に一層の昂奮と緊張が貼り付けられる。鏡は女の  
魂なんだもの。

そつと開く戸の内外の面白さ

朧月夜の梨の花、二人の魂は抜け出したまま、夢の世界を彷徨つて居る。紙礫にも以心傳心、開



ける戸は二人の耳にだけ  
の音、戀は臍に限る春の  
宵、觸れ合ふ肩と肩にも  
血が通つて居る。どこか  
で清元が聞える。...落人も見るかや野邊に若草  
の...何と云ふ情緒ぞ。おう恵まれたる抱擁、彼  
女の唇はもう私のものだ、二人の世界に幸福を除  
いたら何がある。

口説かれた女給に義務のやうな戀

シヤンデリヤの下、水々しい土間に流れる春の



灯は、戀と云ふ異常の昂  
奮を咬らすには居ない。  
脊中で蝶に結ばしたエブ  
ロンの紐、お太鼓の帯の  
下から芽ぐましい豊満な  
肉の香り、紅茶に入れさしたウキスキーは何を云  
はせるか、魅惑的だ、陶酔的だ、オイ俺は君の唇  
に物狂はしいぞ、何？ 若人よ唄へつて？ ジャ  
ズが初まつた、俺の魂ははづんで来た。

惚れた奴見苦しい程使はれる

そんなこと俺に云へば宜いちやないか、なにコ  
ンバクトが無い。よし〜三越へ行つたら買つて



来る。序にコールドリ  
アンも買つて来てやろ  
板ちよこ？ よし〜  
甘納豆はどうだ、食ひ  
しんほだつて？ 宜いちやないか、二人限りでお  
茶でも入れてさ、思ひ出話をしようぢやないか、  
何？ 電話帳の釘が折れた？よし〜俺が打つて  
やる。澤庵石が重いつて？ 俺が取るよ。

それらしい二人へ女中それとなし

たまには宜いさ、ロースに御酒、それからお新



香と御飯、よしよしそこへ  
置いて行つて宜いよ、葱を  
先に入れやうか、油がはね  
かへるから少し退いといで  
焼豆腐に糸こん、さア此邊  
が煮えたよ、お前一杯やら  
ないか、顔がほてるから厭だつて、可愛いことを  
云ふね、それぢやもう御飯にしよう、御飯位は盛  
つて呉れても宜いだらう、女房らしくね...

黙つてた二人欠伸が出て笑ひ

お前があんなことを云ふから悪いんだ。お前だ  
けにのみ忠實な奴隷なんだぜ、それを浮氣もの



標本のやうに口ぎたなくこ  
き下すんだもの、俺だつて  
感情を害すぢやないか、辯  
解をすれば、する程お前の  
追及だ、緘黙にしかずさ、鍋は焦けるし、湯は無  
くなる、随分殺風景な座敷だな、だがしかしお前  
誤解は解けたらうな、笑ふ奴があるかネ、俺の方  
は一生懸命なんだ。

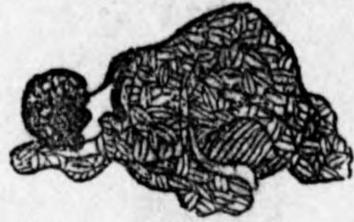
差向ひ鼻毛を抜けば汚ながり

解りました、だけどはつきり信じてしまふ譯に  
も行かないことよ、あ



なたは毎日毎日いろい  
ろな女性達と交際して  
ゐらつしやるんでせう  
危険だわ、あなたはや  
うに女性だけへのみ親切な心理の働く方は、とも  
すればあたしと同じやうに働きかけるやうな機会  
をねらつて居らつしやるんぢやないかと疑はれる  
時もあるよ。あらッ汚ないわ、鼻毛なんか...

泣けるだけ泣くのも戀の姿なり



あたしだつて酔興に共鳴して居るんぢやないこ  
とよ、考へて見ると思ひ當るこ  
とばかりだわ、男と云ふものは、  
女を手に入れる迄は、ありつた  
けの親切を盡すものだが、手に  
入れてしまへば、もうどうなつ  
ても宜い心持なんですつて、其  
通りよ、あたし考へが無さすぎましたわ、第一あ  
なたが最初にあたしへ打明けた時の事を考へて御  
覽なさいな。

くどく奴あたり見いく傍へより



桃の花がチラ／＼と散る夕方でした。母が遠い  
親戚へ行つての留守、あたし一  
人でセーターを編んで居るとこ  
ろへ、足音を忍ばして来たのは  
誰でした。あなたの胸に訊いて  
下さい。あなたはあの時何と云  
ひました。一生に一度は何人も経験しなければな  
らない戀と云ふものを、僕にも體驗する時代が來  
た。僕はどうしてもお前の事が忘れられない。僕  
の對象はお前一人だつて...

いさかひの其處から別な戀の味

そりや判つて居るさ、其時分から私の心に何の變りは無いよ、しかし戀なんでものは朝から晩まで緊張して居られるものぢやない、ほら、此心臓を御覽、こんな過激な昂奮を年



がら年中續けて居たら、第一身體がたまらんよ、ねえ、それだからと云つてお前を裏切ると云ふ譯ぢやない、昔高尾と云ふ太夫は「忘れねばこそ思出さず候」と云つたさうだが、全く其通りだよ。

そりや判つて居るさ、其時分から私の心に何の變りは無いよ、しかし戀なんでものは朝から晩まで緊張して居られるものぢやない、ほら、此心臓を御覽、こんな過激な昂奮を年

嬉しさは叱る目付きへつねる眞似

まア憎らしい。うまいことばかり...何處かで覚えてゐらつしやる



んでせうさうしてあたしを安心させて置いて別に何か求めやうとするんぢやなくつて?

しかし頼もしいわ、かうやつてお互に思つて居ることを云ひ合つて居るうちに眞實が発見されて來るんですもの、あなたの腫が燃えてるわ、あたしの頬が紅くないこと...?

しみぐとする思出に湯が沸り

お互に年を取つたものだな、いろくの智慧を絞り合つて、そッろ歩きや、買



物の相談それがみんな感激と昂奮だつたのに、臘虎の襟巻に腰布圍では、戀をする資格はない、ただどネあの時はどうだつた、お前だつて随分昂奮して居たぢ

やないか、私の眼の中は何となく熱い湯のやうなものが溢れて來て、どうした氣持だつたんだろ、それが今ではかうやつて握手をしたところで、何の感銘も無いぢやないか。

只のよな戀になつてく子が生れ

朝御飯の支度が出来て、もう時間よ、起きて下



さいな、とかなんと云つて來るのが楽しみだつて云つて居た時代もあつたね、それが此頃ではどうだい、子供を使ひによこしやがる、お父ちゃん

起つきよ、蒲團を取つちやつても宜いッて母ちゃんがそいつてたよ、枕を持つてちまふかな、お父ちゃん起つきするんですつて...



嫁姑和合の秘訣

よい夫婦へ折れて嫁を立て



「それはお母さんの云ふことが本當だ。お前もこれから氣をつけるんですよ。嫁の苦勞を目で呑み込んで、姑の顔を立てる分別が主人にありさへすれば家庭は圓滿殊に夫婦はお互ひの愛情を姑の前でむきだしに露はさぬのが何よりの秘訣。

嫁姑ぐるいて主人は凹まされ



「それはお前さんが無理といふものです。昨夜だつても〇子は遅くまで待つてゐたんですよ。それを電話一つ掛けるぢやなし、朝になつて歸つて来るなんて私は何と云つても〇子に同情します」これで主人は包圍攻撃でかたなしたが、天下泰平家内安全と云ふもの。

姑へ相談に来る權がけ



「ねえお母さん、晩のお惣菜は鶏肉なんですけど、お野菜は何にしませう、蓮はお齒が悪いから不可ませんわね。ほうれん草にしませうか、胡麻で...」胡麻ツたつて厄介だからお浸しで宜いよ」姑さんの聲は嬉し相である。

澤庵へ嫁真心を刻み込み



嫁は何事でも姑を先にし、夫を次にする態度を示すやう心がける事、澤庵を別にして細かく切るのも真心の一つ、老人を敬ふ心と効はる心さへあれば折合はぬ憂はないたとひ家内を委されても一々内情を明かす心も必要。

如才ない嫁はお経も読み習ひ



信仰がどうあらうとも、姑の信仰に同化するだけの心掛があれば、凡ての折合はうまく行くお茶湯や線香位は姑の留守でもして置くやうにならなければいけない。按摩やお脊中を流す位は氣轉一つでできることである。

嫁の髪姑に少し異議があり



お前さん、今日のは大變よく出来たよ。私は舊式だから何といつても七三とか何とか云ふ洋髪より丸髷の方が好いね、少し髷がつまつてやしませんか。髷はも少し丸くても宜いね」姑さんの美容鑑賞も嫁さん本位ならお嫁さんは之で満足する。

嫁の柄姑が選ぶ方に定め



「私の若い時は怎麼柄が流行つたものですよ。お向ふの奥さんが着てるらつしやるのは、もう少し濃い色氣だね。でもよく似合ふやうだから之れになさいよ」自分の若かつた時の心持に引比べて時代を知つてやるが姑の義務だ。

湯治場へ姑いそぐ追出され



嫁の世になつたらうるさく干渉しないで、少し位氣に入らぬことがあつても嫁に任せ、相談するやうに仕向けて行けば、お互ひに譲り合ふ氣持ちが湧いて来る控へ目が和合の秘訣。

出  
も  
の  
は  
れ  
も  
の

一、欠伸の巻

嗚呼不景氣の世なりけり、失業茲に三ヶ月退職



手當は先月の末でファイ  
新らしい履歷書を認め  
ること十數通、問題に  
なつて居るのか、煙管  
の脂通しになつてしま

つたのか、味氣なくも又頼りなき世なる哉、カラ  
リと晴れた上天氣、働きたい氣持だけど米櫃は空。

神樂獅子

欠伸の中に顔が見え

鴨居など差上げて見る大欠伸

自棄になるなと云つて下さる親切は、身に沁々



と嬉しいが、扱てそれから  
何か仕事を授けて呉れるの  
かと思ふとさうでもない。



そのうちに……なんて云ふ  
氣休めは、今の空腹い腹に  
は何の足しにもならない、

と云つて矢張り頼らねばならぬ「そのうちに……」  
だ。穴のあいた空氣枕のやうだが、何分よろしく  
お願いする。

大欠伸鼻で殺した溜め涙

頑健な奴の退屈は、寝られない病人と同じやう



な苦痛である。働かせれ  
ば荷車の後押しでも、煙  
筒掃除でも、何でもやれ  
る勇者だのに、よつほど  
閑な世の中だと見える。

こんな人間を使ふと、月  
給の倍位働くんだがな、はて扱勿體ないことであ  
る、誰か機械を買ふと思つて使つて見る奴はない  
かな、へ、んだ。

欠伸から變つてへんな唄になり

しかし頼まれる方だつて樂ぢやないな。俺一人



ぢやないんだから、細  
君の郷里から二人、社  
長のとこの書生も學校  
を出たし、お隣りの親  
戚からも履歷書が届い

て居る。話す口は十も二十もだが、聞く耳は二つ  
しかない。さりとてテキバキ斷る譯にも行かな  
い、一通りは先方の希望も聞いてだけやらねばな  
るまいから……

大欠伸嘆み込んだの鼻の穴



どうせなるやうにしかならない世の中だ、焦つたところで仕方がない。よほど行詰つたら南洋へでも出かけるか。こんな狭い日本で、金持ちの鼻息ばかり伺つて居るから退屈なんだ、太陽様と米の飯...おつと待てよ、南洋に米の飯があるかしら...? しかしバナ、ならうんと有る筈だ。あつちで生きてる奴もある。

手を伸ばす欠伸解放されたやう



郵便ツ！ よをツ、待つてました。どの口だらう。M銀行の計算課かな、それともS商店の用度係かな、Y會社の簿記係かな、何はともあれ幸運の使者だ...やッ...なあんだ、築地小劇場の廣告ぢやないかあら、あら、御丁寧に虎屋の羊羹まで〇〇様と來てらあ...可哀さうに俺の墓口を知らないな。生欠伸茶籠筒なんか開けて見る

二、噫の巻

一つした噫へ母は氣を配り



「ぬくもりの血はたらちめの乳房より、したりの愛そゝがるゝ愛」何と云ふ涙ぐましき母の眞心であらう。机に向つて小説を読んで居る俺を、一心に勉強して居るのだと思つて、茶を入れて呉れる。お菓子を持つて來て呉れる。「疲れるといけないから、また明日にしたら...」と優しく云つて呉れる。有難いことだ、

二つ出た噫なりけり里心



「おい、僕はもう歸るよ」「いゝぢやないの、まだ十一時よ」「だつてお母さんが一人で淋しがつて居るから...」「お母さんなんかどうだつて宜いわよ どうせ家に居る人なんだもの」「だつて悪いよ」「おほゝゝゝ、あんたも坊ちやんね、さあ風邪でも引くと困るから落ついて坐んなさいよ」「だつて...」「だつてだつて何さ...」

大袈裟な噺畜生奴まつける



いや、ほんとに風邪を引いたかな、脊筋がぞくぞくするぜ、さつきの風呂がぬるかつたからな、まるで下が水なんだもの、よく掻き廻して這入るとよかつたんだがね、一寸手を入れたら頃合だから其儘入つてしまつたんだうどんでも煮て食はうか、アスピリン...? なあに、それほどでもあるまい。よくくひどい熱になつたら蚯蚓を煎じて呑むと宜いんだ。

あとの噺を待つて居る變な面



まあ何て顔をするの...? どうせさうでせうよ、濟まなかつたわね、歸りたいのを無理に引止めてさ、お歸んなさいよ、一言目にはお母さんくつてさ、何處のどんなお母さんか、知れたもんぢやありやしない、宜いわよ、もうお酒なんか呑まなくなつて...:あんながどんな顔したつて愛想なんかつかしかやしませんよ...:よーだ。

止めどない噺生醉少し醒め



おい、外套を何處へやつたんだ。あッ、帽子も隠しちまつたな、ほんとに風邪を引いちやたんだよ、四風邪ひくつてことが有るぢやないか。なに...:三惚れられの方だつて...:馬鹿あ云へ...:さつきから三つや四つの噺ぢやないぢやないぜ。『はッくしよッ』それ見ろ又出た。

我慢する噺に痛い鼻の芯



お母さん只今...:! 遅くなつて濟みません、丸ビルの前で佐藤の奴に逢つちまつたもんですから、つい失禮しました。もう十二時です、お眠むかつたでせう、お先お休み下さつてもよかつたんですの...:靴下の雑作ですつて...:どうも濟みません、いやもうお茶も何もいりません、此儘休みませう。あしたは日曜ですから、ゆつくりで宜いんですよ。

三、屁の巻



市川團右衛門が九代目團十郎のお供をしてあるお邸へ招かれて行つた時、お辭儀をしようと思つて居ると下腹が鳴り出した。失禮此の上もないことはよく知つて居るけれども、仕様がなない一つやつて疊をカリ／＼搔いて誤魔化さうとしたら、團十郎が小さい聲で、「屁の音に似てないね」と云つたと云ふ話がある。全く屁と云ふ奴は遠慮を知らないで困る。

屁ついに止める踵を肯んぜず



人生須らく屁となる勿れである。屁でもないと言ふ、人を屁とも思はぬと言ふ、屁のよな話だと云ふ。孰れにしても屁以上に無價値なものは此世にないことだけは確實である。然るに醫學上から論ずれば、屁一つ薬千服と云ふ譬さへある位である。それを何故多くの人は低級なものと取扱つてしまふのだらう。

人前で氣の減るやうな腹が鳴り



暖氣をさまで失禮と思つて居ない人達が、何故屁をそれ程失禮にしてしまふだらう、そればかりではない、健康の操作上腸管内に活躍する、瓦斯と固體の争闘まで餘計なおせつかいと下卑たことに取扱つてしまふ、彼れの生れ出づる惱みに一顧の同情すらも無い。然して殺された屁は出場所に迄迷ふ。

洋服の屁は襟元で立ち迷ひ



胃袋の瓦斯は小氣味よい事に用ひられる。溜飲が下つた。胸が空いたと喜ばれる。然るに悲運なるかな腸管の瓦斯は隠忍しなければならぬ。得手勝手は人間の持味だとは云ひがら、餘りにも片手落な見解ではあるまいか。若しそれ腸管の瓦斯が逆行するとせば、恐らくは、鼻をつまむ暇さへ與へないであらう。あゝ我れ如何せんた。



すかし屁の犯人舌で探される



屁は元來分化的產生體である。然も陽生的爆音が彼の生命である。然るに之れを陰性的潛臭にするのは自然法則にもとるものである。舌の先が黄ろくなると云ふ立證は抑々何に依つて來るか、胃腸の障害が舌頭に一つの變色作用を齎すものであるとすれば、敢て犯人のみが黄ろいとは云はれない。況んや犯人に於ておやではあるが...

腹膜の屁はお手柄に數へられ



見合の最中に取はづした花嫁が、遂に身を投げて死んだ實例がある。餘りに 屁の悲劇である。ところが屁を喰へると、瓦斯は腸管を逆流して血管の中へ毒瓦斯となつて吸収される、メチニコフの學說に依れば、屁が血管へ吸収された時、人間は老衰の道へ急ぐのだと、蓋しこれは消極的自殺である。故に天海僧正は健康法の第一に屁をこけと残されて居る。

思ふさま屁を垂れて見る獨り者



試みに諸君、羞耻と謙讓と、さうして自惚れとお體裁とをかなぐり捨て、そして片足を高くと持ち上げて、心ゆくばかり瓦斯の流出を恣まにしてみよ、天空海潤。其處には自ら拓け行く希望の輝きさへ湧然とする愉快さがあるに相違ない。此意味に於て屁は人類を勇気づける一種の警笛である。

◇屁さま◇

獨り者炬燵で焼けた屁にむせるはしご屁を高點にする無禮講すかし屁で百萬遍の中たるみ屁の玉を目の前に見る風呂の中屁の論に泣くのもさすが女なり一つ出た屁も看護婦は見逃さず蚊帳で出た屁は慘酷に扱はれ女房も屁をこく迄に古くなり汝等は何を笑ふと隠居の屁大入場むせかへる屁を誰かやり

大  
一  
座  
風  
景

もうあと二人です。忙がしさうな顔で飛び廻る幹事が何度時計を見ることか、もうお酌の方も揃つて居るんですから、始めませうか、その内見え

るでせう、どうも皆さんお待ち致しました。席の準備が出来ましたから、御着席を願ひます。入王になる

将棋も、折角生き場所を發見した暮も、幹事が覗いて



は崩して行く。

せめてもう

二人を幹事焦れて待ち

双方が勝つた善にして崩される

頭数だけの座布団が、幹事の分だけを末座に二つ別にして、正面の大床間に鷹の剥製が寒さうである

「あんたこんな所へ坐つては駄目です。お年役で仕方がない、折角坐つたからつて、駄目ですよ、おつとそ

こは幹事の席ですあなたも順に詰めて下さい、あツ、あなたはもう一つ上へ、さあ順につめて下さい、いけませんよ、そんなに手数をかけちゃ...」



正面へ檢束される秀げ頭

席順の混雑は幹事の一苦勞である。惣と末座へ坐つてチャホヤされたい見榮坊なんか當世向ではない

こんなことなら籤でいやおうなしにするんだつけ、と云つて合はない同士が固まつたんでは座が白ける、押しつ押されつ座が極まるのも宴會氣分の一つだらう。行きつ戻りつ席を探してあるのは新米と見てよろし。



配膳に知つてる藝妓眞面目

どれもこれも裾を曳いて、目八分に持った高膳

婆ア藝者を先頭にして、八汐、沖の井、初菊、等々々何と云ふ鹿爪らしさよ。美しくもまた雅なる彼女等の

「失禮しちやふわ...」

「あら、いけすかない...」

なんて言葉は知らぬけに見える。どうぞ座敷の埃を立てないやうに願ひます。お料理には蓋がしてないんですから...



一渡り猪口を眺めて幹事立ち



御多用のところ御出席を煩はしまして恐縮でございます。今日は他人交らず社員だけの懇親會でありますから、充分に飲み、且つ歌ひ、且つ階級を超越して一夕の歡を盡されんことをお願い致します。折角のお集りに粗酒粗肴へ且つ設備萬端不行届きの點は、幹事よりくれぐれも御詫び申上げます。

ヤリ取りの猪口に聊か野心あり



局長、課長はあつちからもこつちからも、しまひには誰の猪口だか判らなくなる、お酌に命じて持つて来た猪口、その儘返盃、御流れを頂戴致す御機嫌取りの猪口、なみなみと注いで貰つて有難く頂く、先方はそれに気がつかず、聊か目のまはりが赤くなつて来る。やれ切れなくなると吸物椀へぶちまける。

かくし藝社長はそれと氣を利かし



形式のお座付が濟むと雑妓の踊りは奴さんから深川になる。一齊に手を叩くころに遊心ほつほつたる社員共、胡座のまゝまで社長に遠慮する見て取つた粹な社長さんは何時の間にやら便所へ立つて行つたまゝ、コッソリ自動車で消える。この呼吸を心得た進行係が立上つて指名権を要求する、パチ〜と拍子の音。

支配人なか〜やらぬ藝があり



私は尤も公平に今晚の使命を全ふしたいと思ひます。先づ支配人の清元を第一着にお願ひしたいのです。(此間拍手破れんばかりいや命令々々と叫ぶものあり)多数の望もありますので、社員を鼓舞する上にも是非共支配人の御發聲を願ひます。勿論支配人の美聲たる所以は吾人の窺知するところではありません(拍手)から、敢て抗辯は許しません(拍手)

三味線に注文がある咽喉自慢

四疊半と蓄音機とでチャンボンに習った神田祭



が、森の小鳥...のところで一すけつまづく、婆藝妓は心得て遠慮がちに引出して来る。木遣りのところで救はれたやうに獨立する。社員共は無我夢中に喝采、

弾いちまつた藝妓のお世辭が「まあ隅へ置けない...どつかのお仕込みね、あたし初めて伺ひましたわ」

都々逸は御順て下戸は何か食ひ

唄ひさうな方へ三味線に向けてあるく藝妓の努力は、まるで客を流つて歩く圓タクのやうな目をして居る。幾つか無駄なト、ンをやつて、漸く引かゝつたのへ大袈裟な掛け聲をかける。字餘りを持って餘して居る。字餘りを知らないので



るホロ酔ひを、助けたくとも文句を知らないのだけコーラコーライ。此間に下戸連のいそがしいこと、運んで来るお料理が間に合はない。

安來節豫て用意の筈が来る

これだけで宴會の人気者と呼ばれる外交部長、ズボンを半分捲り上げて、頬冠り、割箸を二つに折つて下唇と鼻の穴へ立てる、支度は凝つて居るが、やつてる型は一つとして三味線に乗らないところが更に愛嬌、手鼻を



かんだり立小便の姿は鮮やかなもの、兎に角これが十八番として通つて居るんだから素晴らしい。大喝采。

浪花節婆ア藝者に預けられ

「あら、困つちまふわ、あたし浪花節の三味線だけには出来ないのよ、姐さん御生救...御願ひしますわ」よいしよ



ツ樂燕、重友、樂遊！ 虎丸、...？ 誰になさるの...なんて、實はあたしにもうまく弾けないのよ、こんな調子で宜いでせう、先づ眈を甜めてね、少し横に坐るんではたか、趣向だけはつけましたが、節の方から合はして下さいな、ねえ！」

強ひられて新参琵琶を少しやり

今夜は駄目だよ、何か一づゝやらなければ御飯



を食はせないんだから、何でも宜い、鳩ボツボでも、青い目をしたお人形でも、桃太郎でも、それも出来なければ鹹餅立ち琵琶...結構、待つてまして歩くんだ、何に？

四五人のジャズへ身振の藝妓来る

婆さん藝妓、何とかして三味線へのせて見よう



と思ふのだが、どうしてもうまく行かない、たうとう諦めてしまつて身振りばかりの御機嫌取り、「樂じゃないわ、この頃の流行と來たら、みんないね、何てはやせば宜いの...？ テケテケテケテケ、何だか變ね、よう、テケくくく...」

民謡へどうやら合はす婆藝妓

さうさう、そんなところは一寸立山ね、あら深川



みたいなどともあるわ、これ何て云ふの、伊豫節...？ さうあら、今度は何...？ チャツツキリ節麥屋ぶし、何だか變ね、コラサノサ見たいね、何でも宜いのよ、三の絃を遊ばしてさ、一二で遊ばして置かうぢやないの。え...？ 何ですつてゲーロが鳴くから、あまーぞらよう...ですつて...いやあね。

大一座追手のかゝる段梯子

おつと、いけない、ドロンはひどいぞ...一緒に



歸らう、二次會だらう、心得て居るよ、それとも僕が行つたら邪魔か、宜い...？ 一寸待つて呉れ、僕は裏櫓子から下りて行くから、大丈夫、まだあんなに熾んだ。あいつ藝妓と三拳の呑みこを始めやがった。あれが初まつたら夢中なんだから、あいつあしたは缺勤するぜ。

へぼ將某四十八手

末席は遅て酔つたデツカンシヨ

遂に酔はされた謹嚴なる若輩連、茲に胸襟を披

瀝してデカンシヨとなる。



受付老人、庶務部員、給仕



に毛の生た文書係見習ひ老

る。

いれ若きも雷同高唱、高級社員は何時の間にかまるで齒の抜けたやうに居なくなる。この時こそ彼等が蘊蓄を傾倒して詩吟、野球應援歌、床も抜けんばかりの大活躍である。

徳利を探して歩く下卑た奴

そのデカンシヨの真最中に立上つた受付老人、座敷の隅から隅までほつゝき廻つて、徳利を耳もとで振りたてゝはお酒の有無をたしかめる、これは又なんと下卑た奴。

女房に云ひ當てられる三次會  
二次會の耳打ち願を軽く振り  
總踊りどうも仕方がない一人  
膝枕つくづく鼻の穴を見る

吹けば飛ぶやうな将棋にマチの棒



どうだ、一番行かうか、先達の仇を取る氣は無  
いか、ある...? さあ來  
い、一枚落だつたね、なに  
...? 對馬だ...? さうだ  
つたかな、三番勝つて手直  
りになつてるんぢやなかつ  
たか、二番勝ち越して居る  
...? 嘘々、あの時は入王になつちまつて勝負な  
しぢやないか、まあどつちでも宜いや、實力の争  
ひなんだから、おつと歩が一つ足りないぞ。

端の歩を突いて一服吸ひつける



さあ、金か歩か、よし俺が先手だ、まあ宜いや  
君に先手をやらうか、規則通  
りだつて...? 抜かしたりな  
此奴、先づ定石通り七六歩か  
な、君は三四の歩だらう。さ  
うすると俺は先づ六二銀とし  
て敵に懐ろを讀ませない軍略  
で行かう、ようツ五六歩と來たね、位を先に取ら  
うつたつて許せるものか、俺の方でも五四歩、さ  
あこれからが實力の問題だ。

一手毎何か云つてるへボ将棋



なある程、手の無い時は端の歩か、ふさしの下  
の雨宿り、と俺もつくよ、さあどうだ、中飛車だ  
らう。先達あの手で勝  
つたからつて今日は其  
手は食はないよ、へッ  
五三銀と上つたらどー  
んなもんだい。おやッ、  
飛車先を突いたね、西  
勘介一流膽さしの一手か  
と見て東へ進む山本が、  
いやお美事〜。

見物の下知にしたがふへボ将棋



おい、見物少しうるさいぞ、君もまた君だ、教  
はつた手を素直にさそう  
なんて、卑怯だぜ、あッ  
角を取りかへに來やがッ  
たな、なに...? 取りか  
へるのは損だつて...?  
おつと待つたなしだよ、一體誰が指して居るんだ  
い。云はれる通りになるんなら、俺の方へだつて  
教へてもよさそうなもんぢやないか、えい...と  
こいつは弱つたな...



それ程でない弱つたは筋をつけ



つツ切る飛車先き歩で止める、か、おやく飛車があそこまで下りやがった。こつと、桂馬の高上り歩の餌食だ危ないく、金銀財寶たからの山とこいとも不可い、王様をこつ逃けて置かうか、待て待て待つたじやないよ、駒から未だ手が離れて居ないんだから、こつやればあゝ来る、あゝやればこつ来る...

勝將棋如何にくと鳴らして居



そんなに將棋盤の横ッ腹を叩くなよ、駒が踊り出しちまふぢやないか、これは俺の歩だぜ、先刻君が銀を上げた時にこれを突いたんだから此處だよ、宜いかい...！此處へ角を打つたらどうだ、飛車を逃ければ歩を取つて成る名手だね、如何にくと来らあ二者そのいづれを撰ぶとも、其一は遂に敗る運命だ。楠孔明と雖もこればつかりは免れまい。

考へる煙管は頭へ持つて行き



おやつ、歩の頭へ飛車を持つて行つたな、これは氣がつかなかつた。なるほど考へれば手のあるものだな、さうかして見ると此角は成れないのか、待てよ、なま角と相撲取り小廻りが利かぬと云ふことがあるこれは一つ考へなければならぬ。ふむ、なに...？煙の出ない煙管を何度吸ふんだつて...黙れ見物め...

持駒は胡座の中へ握り占め



ところでお手は...？角に桂...？角桂からかわ目に山椒か、よし、樽でかこんだな、樽崩しに腰かけ銀か、こつ行つたらどうする。厭でも其銀は上らずには居られまい。やッあんなところへ歩を打ちやがる、癩だな、ようし、そんなら俺はこの桂を上げる、銀が逃れば歩を取つて五筋の覗きだ。へッ...二挺替へなら歩でもよい、とな。

負け将棋逃るたんびにお手は何

そんなところへ香はひどいね、そこでお手は

どうして

...?角と桂だったね、銀

がある...?不思議だね、

あゝさうか、いま此處で取

られたんだつけない、よしよ

しそこで、お手は...?角

と桂か、一體角を何枚持つ



て居るんだい。未だ打たない...?なるほどさう  
だ、盤には角が一枚しかない、そこでお手は...  
角と桂だったね...

勝将棋這つて来る子へ世辭を云ひ

おう坊や、宜い子だね、あらくよだれが大へ

んだ、だあくぢやあり

ません。いまお前さんの

お父さんは大へんなんだ

死ぬか生きるかの大鉢巻

青息吐息瀕死の状態可哀

さうだねえ坊や、おうお



う冷たいお手々をして居るね、お父さんへ應援と  
お出でなすつたね、あッおむつをあんなどこへ置  
いて来ちやつたよ。

将棋盤差上げて居てこれ乳母よ

おういッ、何だつて子供なんか寄越すんだい、

駄目ぢやないか、鳥渡目

を放したら...:たつてし

やうが無いよ、盤の上へ

上がらうとして、滅茶滅

茶にしてしまつたぢやな

いか、あつちへ連れて行

け、あッ、小便をしちやつたぜ、困るなあどうも

少し氣をつけろよ、ほらく涎かけが落ちたぜ。

おい雑巾く...:



王手飛車考へさせて燐寸を取り

いやに悠々として居るね、燐寸でなくつたつて

煙草盆に火があるぜ、何...?消えちまつた...:

うそつけ、赤いのがある

よ、それは蜜柑の皮だ、

ほッ、ほッ、ほッ、慌て

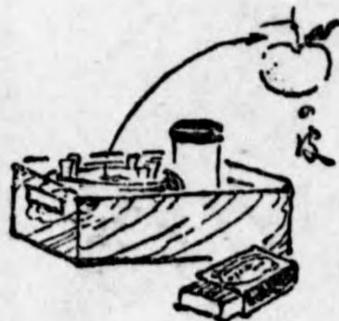
ちや不可い、さあ大變だ

王手飛車取りと来たね、

知つてるよ「へボ将棋王

より飛車を大切に」ぢやないんだからな、しか

しこれは困つた。忠ならんと欲すれば孝ならず。



頂いて飛車を取られる口惜しさ



おい〜そんな惨酷な真似をするなよ、それで無くつたつて頭の心が痛くなつて居るところだ。チヘツ、あの餓鬼が来て搔廻しやがつたもんだから、すっかり率が悪くなつちやつたおい見物：：何をゲラ〜笑ふんだい人の憂を好む奴は出世出来ないぞ、とは云ふもの、俺の方だつて満更ぢやないんだ。よしこう来るか、おツトツツ待つたり待つたり：：

一手すき貸してやるかとからかはれ



チエツ残念だな、この角が成つて、銀と張れば動きのとれない敵だ。おい：：待ち駒は卑怯だよ必死だつて？ そんな必死があるかい、その桂はどこへも利いて居ないぢやないか。それさへなければ俺の勝なんだ、ねへ諸君：：さうだねえ、もう一手なんだぜ、二タ手で詰むんだのに口惜しいなア。

へぼ將棋寄つて集つて指しちまひ



どうぞみんな、公平な目で判断して呉れ、僕には助言が一つも無いんだぜ、何：：？角の成つたのは俺達の指圖だつて：：あれだけぢやないか、金が上がらなかつたのもさうだつて：：それだけぢやないか、王が右へ寄つたのもさうだつて、それだけぢやないか、はッはッはッ、兎に角負けるのは負けたが將棋は俺の勝だよ。

負け將棋どうも仕方が無く笑ひ

待て〜：：いや待つたぢや無い、研究だよ、こうツと、俺が此歩を突いたから君の銀が上つたんだね、それを突かないとして、この金が寄らないとして、飛車が此處へ廻らないとして、この桂は張らないとして：：まあ待てよ、それぢや初めから差し直したつて：：？ふ〜ツさう云ふことにもなるね、しかし讀違ひと云ふこともあるからな、この角は茲まで下つて行く、と、この歩をつかずに、この銀から上つたらどうだつた、あ、さうかうツふツふ〜それぢや一手一ぺんだ。

あ  
ら  
目<sup>め</sup>  
出<sup>で</sup>  
度<sup>た</sup>  
い  
な

世は緊縮であれ、節約であれ、何が扱てお正月はむかしから目出度いもの風邪を引いたお婆さんのやうな顔で迎へるものではない、ハイ、お目出度う、ハイ、お目出度う、坊はこんど幾つになつたんだつけな、六つ!...あと一つお正月をすると學校だね、温順にならなくつちや駄目ですよ...



そして立派な人になるんですよ。

元日や改めて子の年を聞く

屠蘇の座に黙然とこそ坐りたれ

さあ、お前も臺所の方は宜い加減にして、祝つたらどうだ、なに餅を幾つ食ふかつて...あはッはッは、お雑煮か...! さうさな、二つもあれば宜いよ、あとお銚子はついで居るだらうな、お屠蘇つて奴はベトくして二杯はあやまるね、何は兎もあれお目出度いんだ、お前も一ぱいやつたらどうだ、顔がほてるからお預けだつて...? それちや眞似だけでも...



元日や妻他處行の姿で居る

うふ、うふ、古川柳にも「松の内我が女房に一寸惚れ」と云ふのがあるが、全くいつものお前ぢやないね、何もきまりの悪いことは無いぢやないか、事實だよ、頬紅が少し過ぎたかね、鬢の出具合が馬鹿に宜いぢやないか、半襟が少し派手かな...何...? 一昨年のだ...まあ宜いや、お正月だもの少しは若くなるさ、さあ...お屠蘇だ...



年賀状装つた端書が二三枚

おつと年賀状か...! 誰だいその羽の生えた馬を金ピカでよこしたのはSの奴か...錢も無い癖に相變らず凝り屋だな、おう社長からも來てるな「社長から來る平凡な年賀状」か、あッ、これは誰だい、女中の親だ...? あれは越後か、あんまりうまい字ぢやないな。さうく此奴のそこへは出さなかつたな、彼奴はまたよく越して許り居やがる。



岸の巖波を水晶にして返し



勅題とお出でなすつたな。うまいよ此句は、これで繪が書いて無いと奥床しいんだが、二見ヶ浦の寫眞と來ては俗だね、新杵の新葉大賣出しと云ふところぢやないか... Iの奴、相變らずまづい歌をやつてるな、この寫眞は誰だ、あッ課長の家庭だ。若い奥さんだな、一同無事越年仕候か、うふッ、妻君大喜びだらう。

元日の氣分隣の蓄音器



もうやつてるな、お隣りは何なんだい、銀行へ出て居る人だつて... 新家庭らしいな、まだ若いんだらう、俺達には齒の浮くやうなレコードばかりかけてるぢやないか、あれは何とか云つたな、フォックス・トロット、ジャズバンド、愛してるベビーさんと云ふんだらう、何となく腰の浮くリズムだね、若い人は幸福だ、や、キッスして頂戴だとき...

一合になつて胡坐のお正月



お燗が出来たつて...有難いな...お雑煮はあとで祝はう、まづ寛ぎのお正月だ、それともお汁だけ貰はうか、この數の子は大當りだね、これの悪いのに當つたら往生だよ、鱈があつて皮がついてるなんざあ、見ただけで謝まるね、ごまめの方は駄目だ、齒の間へはさまつて黒もじの先がサ、ラになつてしまふ。坊や、羊羹をあけようか、

ナフタリン臭い御慶のモーニング



いよう...これはくお早やぐと、まあ上り給へ、まだ此處が初りだつて...? 宜いちやないか、兎もあれお屠蘇を一つ祝つて行つて呉れ、いやく上らなきや挨拶しない、おい座蒲團は...!はいく舊年中は、本年も相變らず...俺もこれから出かけるんだ、一緒に行かう...おい、お銚子だよ...君もこの方が宜いだらう、お屠蘇は一抔に限るもんだ。

公然とへられれて居る三ヶ日



今年は何となく儲かるやうな気がするね、不景  
気だつて君、食はずに死  
んだ話は聞いたことがな  
いからな、くよくよする  
ことはないさ、うんと呑  
んでうんと稼ぐんだ、何  
か唄はうか、この頃は三  
味線に乗らない唄ばかりだね、てなもんやない  
かくなんで、黒ン坊が踊つてるやうな唄ぢや俺  
達の齒に合はないが、どうだサノサ節では……

今年は何となく儲かるやうな気がするね、不景  
気だつて君、食はずに死  
んだ話は聞いたことがな  
いからな、くよくよする  
ことはないさ、うんと呑  
んでうんと稼ぐんだ、何  
か唄はうか、この頃は三

追羽根の小僧は切られ奥三になり



木履についた鈴の音、振袖に立矢の字、鼻の頭  
から剥けかゝる白粉もも  
のかは、追羽根子羽根に  
夢中なお嬢さん、遊に主  
従はないとムキになる小  
僧。横町々々をグラウン  
ドにして古典的なローン  
テニス、正月でなければ見られぬ街頭風景、小僧  
の顔は墨と白粉で横縦十文字、切られの奥三と異  
名を取る。

木履についた鈴の音、振袖に立矢の字、鼻の頭  
から剥けかゝる白粉もも  
のかは、追羽根子羽根に  
夢中なお嬢さん、遊に主  
従はないとムキになる小  
僧。横町々々をグラウン  
ドにして古典的なローン

敷居から裾がこぼれる歌留多會



春の媚めきは茲にも溢れて、恰もメリンス屋の  
物干のやう、妹に憧れを  
持つ友もあらう、失戀を  
胸に秘むる姉もあらう。  
「歌かるた人と云ふ字に  
手が五本」と云ふやうな  
露骨な争ひを別にして、  
其處には、惱ましき春の心のときめきが、嬉しさを  
オブラードに包んだやうに嬌やかな雰圍氣を醸  
して居る。

前髪が額に觸るゝ歌留多會



むべ山風を嵐と云ふらん……はい……あらあた  
しのよ、するいわ、あた  
しよ、放して頂戴よ、姫  
御前のあられもない、手  
と手を重ねたまゝの奮闘  
油で冷えた前髪が、少し  
上氣したオールバックの  
額に觸れる、電氣を感じたやうに男の心臓は只で  
ない、矢張り女には敵はないな。

繪双六母のは抱いた子に振らせ



お父さん、双六の中へ入つて：：一番上りがこのお蜜柑三つよ、二番上りが二つ、僕さきにやるよ、お父さん、見てよよ、外へ出ると駄目なんだよ、宜い、ほうら六、うまいな、僕はもうこんなに来ちやつた、さあお父さん、駄目々々、外へ出ちやつたのは嘘つこだ、さあ今度は母さんの番だよ。あつ、お母さんのは戻りだ。

神樂獅子女中の尻を横に食ひ



いま萬歳が来て歸つた許りだのに、猿廻しが来る。猿もだんく、進歩してジャズを踊つたり、剣劇なんかまでやる、爺さん婆さん寺参りなんかはよくくの貧乏猿でなければやらない。テケレンテンテン、こんどはお獅子だ、十銭はすめば、ヒョットコもやる。お正月は何かにつけても目出度がる、悪魔を拂ふんだと云ふ。

正月を持って餘して居る犬殺し



いくら商賣だと云つても、流石に正月だけは遠慮せずばなるまい。あんな太つた犬が居る、あれなら皮だけ取つても素晴らしい。あつ、あいつは首輪をつけて居ない、確に野犬だ、飯やの臺所でも稼いで居ると見えて丸々してる、松でも取れたらなと思ふんだが、目出度い正月だ、もう少し生かして置いてやれ、この所犬殺しお預けの體：：

正月もそろく寒い十四日



「飯はよいものと氣のつく松の内」七くさだと云つては呑み、鏡開きだと言つては呑み、餅と酒とですつかり胃酸過多になつてしまつた胃袋も、バタバ四半斤の晝飯になつて來ると襟元がぞつと寒くなる。損をする程休ませて置いた省電のバスが、チヨッキからちよいちよい出るやうになると、これから來年迄の日が多過ぎるやうな氣がする。



歳  
晩  
風  
景

松の内金解禁がファイになり



今度こそ豫算を立て、臺所のものは金解禁の現金買ひ、いくらづつでも貯金するやうにと元日に憲法は定めたものの、扱て松の内のお目出度だけで酒屋と魚屋だけは公債になつてしまつた。經濟家庭難來ると絶叫しても、月給が上る譯ぢやなし、すたこら稼いだ去年通りか、ハツクシヨイ、風邪まで引いちまつた。

◇新年氣分◇

元日はまだ恐いから戸を開けず元日の町はまばらに夜があける錢のある顔をして居る松の内正月は隣からでもしやちこばり青ざめた顔へ雑煮が別に出來神樂獅子首をねぢると暇乞ひ藪入りの出がけに物を隠される子の選つて買ふを見て居る凧の糸歌がるた人づてならで下女取れず羽子板を預けて帯をしめ直し

引札が討死してる暮の街

町内の聯合賣出し、割引債券發行、蒲團屋の投資、醬油屋の割戻券附賣出し、店仕舞五割引捨賣、忘年演藝大會、春のレコード、既製洋服の月賦販賣、靴は〇〇の特製品に限る。メリヤスの赤札附大賣出し、曰く何々、曰く何々、町から町へ電柱のやうに配られた引札撒きの人足、女、洋服の紳士、社會鍋の士官服、これで此世が終りになるやうな騒ぎ、だがしかし、哀れなる哉引札よ、揉み苦茶にして捨てられる。それでも彼等は一生涯懸命。その何割がお客になることか...

緊縮の暮見るだけの人通り

飾窓のデコレーションは、照明と色彩の配合に合理化されて、購買慾を刺戟する。がしかし、緊縮意識に緊縛された懐手の人達は、別に参考にする爲と云ふのでもなく、そろ歩くのも暮らしい。裏返りになつて居る正札は、同業者への秘密と、値踏みをさせる爲めの技巧ださうだが、買ひたい氣持の無い人達に取つては、何等の好奇心さへも唆らない。不景氣なる哉、不景氣なる哉、稀には値切つて見る勇氣のある客はないか、いくらでも負けて賣りたい品だのに...

さて何か買はねば暮のやうてなし

伸びんが爲めの緊縮である。成さんが爲めの節約である。如何に強要されようとも敢て顧みることなき堅固な信念を持つてこそ、經濟國難に處する國民の襟度である。だがしかし、せめて子供のセーター位、妻の半襟位、改まる春への慰安である。序にメリヤスの襯衣一枚、ネタクイも可なり古くなつた。妻の下駄もその通り、子供の帽子が小さくなつた。矢張り暮は買物のある方が景氣がよい。景氣はよいが財布は空になる、まよよ、春から稼ぐことだ。

これしきの品で貼出す福引所

お祭禮の神酒所が暮になると聯合賣出しの福引所と變る。一圓以上御買上げに對して福引券が一枚、最中の皮で出來た福引が山と積まれてある。小町絲やはみがきは誰にでも當る。誰か素晴らしい算筒でも引當て、呉れ、ば景氣づくがと考へるのも福引所の番人心理、一圓五十錢の置時計一つ引きあて、も、猫が鼠を取つたよな騒ぎ、恐れ入りますが、お所とお名前を...墨黒々と筆太に、三枚續きの半紙へ書いて貼出される。氣の小さい奥さんなんか、眞赤になつて濟みません〜。

ボーナスは内懐ろて封を切り

社長から一場の訓示があつて、角封一通、ものものしくも授與される。サラリーマンが一年に二回の緊張期である。貰つた面々事務室の片隅、食堂で一ぱいの珈琲、中が知り度い、さりとて開けて見る譯にも行かず、指の先で封筒の上からコツソリ診察する。五圓札にしては薄過ぎる。十圓札なら幾ら位、百圓札なら二枚が關の山だが、それにしては形が小さい。便所へ行つて開けて見ようか、もう先様の咳拂ひだ。内懐ろでモチ／＼封筒のコバを千切つて、手觸りから先づ考へる。

ボーナスの日の裏口に洋服屋

有る金の減るのは經濟の原則だが、有りかゝつた金を減しに来るのは少しテンボがはや過ぎる。何時どこで聞いたのか、洋服屋の番頭、月賦の残金を狙つて薄氣味の悪いニヤ／＼笑ひ、あはよくば新規の注文まで取らうと云ふ、油断も隙も無い世の中である。明日来いと云つたつて動かばこそ明日になれば涼しくなつてしまふボーナス袋を見抜いたやうな顕敏な眼つきで、あと二つ残つて居る月賦に五つ位のお辭儀は敢へて厭ふところでない。斯くしてボーナスの影は薄くなつて行く。

御歳暮の何處へ落つく何軒目

虚禮と云へば虚禮だが、さて世渡りには何となく必要なお歳暮である。お歳暮に依つて首のつながらる社員もあれば、月給の上がる課長もある。上は三越の切手より、下は赤玉ポートワイン二本に至るまで、氣は心と云ふよりも公然の賄賂と云つた方が當然らしい。貰つた鮭を其儘に次から次へ運轉されて、乾からび切つた姿でまた元の家へ逆戻りして來ると云ふやうな滑稽も、決して滑稽とは云はれない。鮭で仕合せ豆腐なら、二軒目あたりで角が丸くなる。

來年は豫算にしよう年の暮

毎年の事だが暮のドン詰りは大抵の人を覺醒させる。今年こそ屹度、來年は是非と、つもりだけはあるものゝ、いつも年末の財政はあやふやとなるのが定例。豫算で毎月の生活を立てれば、家賃もこんなになまるまい。拂ひもこんなに残るまい。どうせ足りない金なら今年は今として置いて、來年からは一定の豫算で生活して行かう。家庭會議の話題はいつもこれ、屹度忘れずに來年の生活は豫算を立て、呉れ、と頼んでもどうだか...

?

の

人<sup>々</sup>

々々